

難読地名の読みと由来

日本国内版

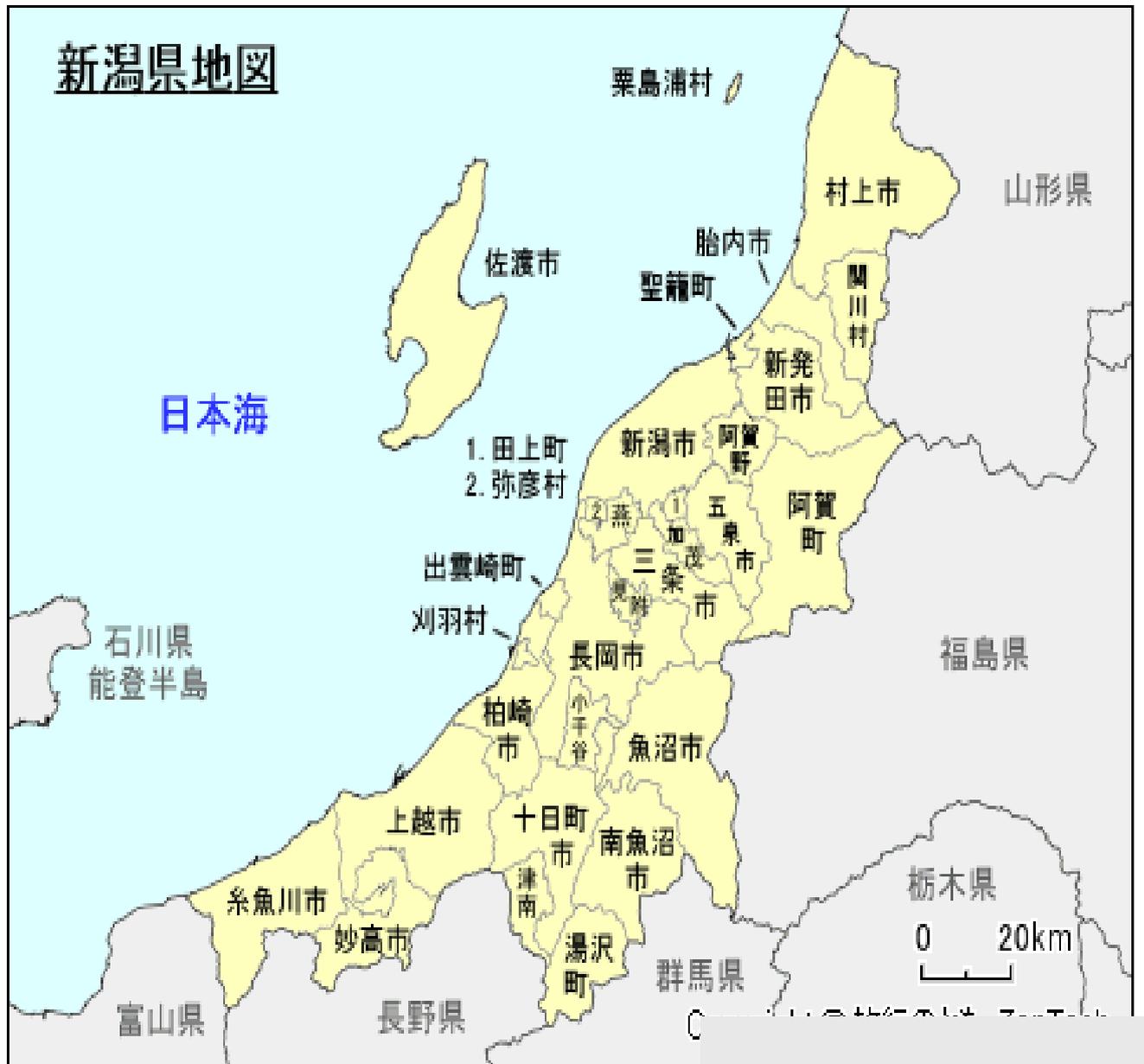
中部地方編



上総の国いちはらの歴史を知る

日本国内の地名は、有史以来に付いたものや、地域の統廃合などの都合で命名された地名があります。そしてその地名は素直に読める地名と、読めない地名があります。ここでは難読地名を都道府県ごとに選び、その読み方と由来を調べてみました。

新潟県



NO	地名	読み方	由来
1	沼垂	ぬったり	新潟市・由来は、647年に設置されたとされる「滞足柵（ぬたりのき）」に由来する。この「滞足柵」の「ぬたり」という読みが「沼垂（ぬったり）」に転じたという説が有力です。
2	一日市	ひといち	新潟市・由来は、江戸時代から明治22年（1889年）まで存在した一日市村において、毎月1日に市場が開かれていた事に由来する。
3	秣川岸通	まがさかわぎしどおり	新潟市・かつて寛延年間に出来た「厩島（うまやじま）」という島を前身とする地域に位置している。由来は、馬が食べる草が生えていた事

			から付いた地名。
4	獺ヶ通	うすがどうり	新潟市・由来は、江戸時代に「獺ヶ通新田」として開発された。この地域は、かつて信濃川左岸に位置する西酒屋の一部。
5	新飯田	にいだ	新潟市・由来には複数あり、一つは、弥彦神社の贄田（にえだ）であったという説と、新しく開墾された田んぼを意味する「新田」に、後に「飯」の字を加えて「新飯田」となったという。
6	鳥原	とっばら	新潟市・由来は、行基が聖武天皇の病氣平癒を記念して、3体の仏像を彫刻して石室に安置した際、野鳥が木の実をくわえて宝前に供えたという伝説が由来という。
7	赤縮	あかさび	新潟市・赤縮村は古代より有った地名のようですが、由来についてははっきりしない。
8	一之渡戸	いちのはた	長岡市・由来は、刈谷田川を渡る場所に由来する。1497年の「大関政徳外三名連署役銭注文」に「一之渡」として登場している。
9	廿六木	とどろき	燕市・由来は、川の水音「とうとう」に十（とう）と十（とう）とを合わせて二十になることから「廿」の字を当て、「ろき」に「六木」を当てて「廿六木」（とどろき）と読ませた。
10	杣木	そまぎ	燕市・この地名は平安時代末期の955年頃からあり「そまき」という表記で記録がある。
11	新発田	しばた	新発田市・由来には諸説あり、荒地を開墾して出来た新田「新開発田」の転訛した説と、潟湖に接する「洲端（すばた）を由来とする説アイヌ語で「蛙が取れる所」を意味する「シビタ」という説がある。
12	五十公野	いじみの	新発田市・由来は、この地域にある高さ80m前後の山がたくさんあり「五十峰山（いじみねやま）」と呼ばれていたのが由来という。
13	中束	なかまるけ	岩船郡関川村・由来は定かではありませんが、山と川の間地という意味の「なかま」と傾斜地を意味する「まるげ」が合わさり「なかまるけ」となったと思われる。
14	小千谷	おじや	小千谷市・由来は、平安時代の「和名抄」にみられる、古代魚沼郡の4つの郷のうちの一つ「千屋郷」が起こりと言われる。
15	蕨生	ひう	小千谷市・由来についての明確な情報はありませんが、戦国時代には重要な役割を果たした「蕨生城」があった。この城は、三国と信濃川を見下ろす交通の要衝に位置し、関連した屋敷や城に「関連した地名が多く残されている。
16	逢谷内	おうやち	新潟市・この地名の具体的な由来は不明ですが、新田開発で名付けられたという。
17	五百川	いみがわ	三条市・由来は、南北朝時代（1334年頃）、京都の美しい公家の娘が難病にかかり苦しんでいた所「都より数えて、五百本目の川を上りし所に霊泉あり」と不動明王のお告げがあり、その温泉に辿り着き、無事全快して京に戻ることが出来たという。（現在の磐梯熱海温泉）
18	筋平	あざみひら	十日町市・由来については不明ですが、1492年（延徳4年）頃には既に「筋平村」として記録が残っている。

19	苧島	おのしま	十日町市・由来は、「苧」は「からむし（苧麻）というイラサク科」の多年生植物で、繊維は細く長い、強靱で光沢がある為、高級な麻織物である上布（じょうふ）などの材料として古くから重宝された。 この苧島にカラムシが自生していた事で付いた地名ではないかと思われる。
20	城之古	たてのこし	十日町市・この地名は「城」に由来すると思われるが、いつ頃城が築かれた城かは不明。この地域の遺跡からは弥生時代の遺跡が出ている
21	勝木	がつぎ	村上市・由来は、「かつぎ（潜）」が語源で、地質が砂状で「水が伏流するところ」を意味し、当時は海が湾入りし、これに流入する川の両岸にガツポが生い茂り、これが転訛して「ガツ木」になったという。
22	山北町	さんぽくまち	村上市・由来は、古くからその地域が「山北郷（さんぽくごう）や「葡萄山北」（ぶどうさんぽく）と呼ばれていた事に00由来する。1955年に周辺の5ヶ村が合併した際に「山北村」となり、1965年に町制施行により「山北町」となった。
23	柵口	ませぐち	小系川市・由来は、入口が柵で仕切られているような場所を言う。
24	能生	のう	小系川市・由来については諸説あり、主なものは「野」（の）に由来するものと、アイヌ語の「nup（ヌブ、野を意味する）の語源説がある
25	美守	ひだのもり	妙高市・由来は、もともとは「夷守」で、上杉謙信の頃には「夷守郷」と記されている。これを「美守」と書くようになったのは江戸時代になってからという。「夷守郷」は「蝦夷（えぞ）の監視する郷」
26	葎生	もぐろう	妙高市・由来は定かでないが、「葎生」や「虫生（むしゅう）」という地名は、かつて麻系の原料となる「苧麻（からむし）」という草がよく生えていた土地を指す。
27	早出端	はいでばた	五泉市・由来ははっきりしませんが、「早出」が意味するものとして開墾に関係があると思われる。昔、川沿いの湿地帯や荒れ地を朝早くから夜遅くまで開墾し、良田に変えるために人々は勤勉に働いた事から「早田村」と呼ばれるようになったという説がある。
28	本田屋	もとだい	五泉市・由来ははっきりしませんが、「新田」に対抗する表現で「本田」があり、「本田」とは徳川時代以前から開発されていた田畑を指す言葉です。また、「本田屋」という屋号を持つ有力の家や商人がそんざいし、その屋号が定着したとも考えられる。
29	河沢	こうぞう	上越市・由来についてははっきりしませんが、慶長2年（1597年）には「かうそう村」として表記されている。当時の戸数は8戸で、人口は31人との記載。
30	上昆子	かみびりこ	上越市・由来は、小林存氏の「県内地名新考」によると、「蛭子尊（ひるこのみこと）、すなわち夷（えびす）神社の氏子であろう」とされている。
31	草水	くそうず	阿賀野市・由来は、古くから算出していた石油を指す「燃水（もゆるみず）」が「くそうず」と呼ばれ、それが転じて「臭い水」から「草生水」「草水」などの漢字が当たられた事に由来する。

32	水原	すいばら	阿賀野市・由来は、平安時代末期にかけてこの地を治めていた城氏が源頼朝に滅ぼされた後、関東御家人である大見氏が地頭職に任命され、後に「水原氏(すいばらし)」と名乗った事に由来する。
----	----	------	---

富山県



NO	地名	読み方	由来
1	水橋肘崎	みずはしかい なざき	富山市・由来は、「水橋」は古くから交通の要衝であり、水運が盛んだった事に由来し、「肘崎」は「かいなざき」の由来は、肘のように曲がった地形や突き出している場所と思われる。
2	下富居	しみふご	富山市・「富居」の由来は、遊水地を意味する不湖・副湖が語源と伝えられる。

3	総曲輪	そうがわ	富山市・由来は、富山城の外堀が「曲輪」(くるわ)と呼ばれていた事に由来する。かつてこの地域は富山城の外堀に面しており、明治時代に堀が埋め立てられた後、門前町として発展した。
4	四十物町	あいものちょう	富山市・由来は、塩魚類の総称である「あいもの」に由来する。「あいもの」とは、鮮魚と干魚の中間程度の塩魚の総称。「あいもの」には「相物」という当て字が使われていたが、その後文字遊びで「目木」と書き、判じ物として「四十」を表記するようになったという。
5	綾田町	あいでんまち	富山市・由来についてははっきりしません。
6	西田地方	にしでんじかた	富山市・由来は、田地の続く所の意味。
7	今生津	いもづ	富山市・由来は、神通川の水運における舟着場を意味する「津」に、「今」と「生」が加わったものと思われる。
8	長走	ながしり	富山市・由来は、神通川沿いの段丘に位置する事に関連すると思われる。
9	葛原	つづはら	富山市・由来は、地形に由来する事が多く「葛」と「原」という漢字から構成されている。葛が生い茂る平らな土地を指す。
10	山田宿坊	やまだすくぼう	富山市・由来は、山田にあった宿坊からついた地名。宿坊は、寺社に参詣する人々の宿泊施設を指す。
11	婦中町平等	ふちゅうまち だいら	富山市・「平等」という漢字が示す通り、差別や偏見のない理想郷のような場所というイメージから付いた地名。由来は、村の周辺が広い平地である事による説と、開拓当初開拓者が荒野を平等に分割した事に由来する説もある。
12	熊野道	やんど	富山市・由来は、熊野神社への参詣道が通っていた事に由来する。
13	芦生	あしゅう	富山市・由来は、葦(あし)が多く生えていた土地であった事に由来する。
14	牛滑	うしなめり	富山市・由来は、牛岳スキー場へ向かう途中の高台に位置し、「牛が滑るような地形」と関連があると思われる。この地域には、縄文時代の遺跡「牛滑遺跡」がある。
15	牛ヶ増	うしがませ	富山市・由来は、この地域は神通川舟運に執着点であり、飛騨地方への物資運搬の際に、ここから山道が険しくなる為に、荷物を運ぶ牛を増やした事に由来する。
16	葎原	むくがはら	富山市・由来については、はっきりしませんが、「葎(むぐら)」とは荒地や湿地などの山野の道端に繁茂するつる草を指し、カナムグラやヤエムグラなどが有名です。
17	翠尾	みすお	富山市・由来については不明ですが、興味深い伝説や伝承が残されている。「翠の池と龍神伝説」では、昔、この池にはエメラルドグリーンの水の美しい池があり、この池には龍神様が住んでいて、地域に恵みをもたらしたという。その池の「翠」と龍の「尾」から「翠尾」という地名になったという説がある。
18	東坂下	さこぎ	富山市・由来は、「サコギ」という小さな河谷(谷川)を表す地方語に由来する。元々は「サコギ」という音に「坂下」という漢字を当てた

19	八尾町城生	やおまちじょうのう	富山市・由来は、「城生城（じょうのうじょう）」に由来する。この城は南北朝時代に斎藤氏によって築城されたと言われ、230年にわたり城主を務めた。戦国時代には、神保氏や佐々成政との攻防が繰り返された。
20	大玉生	おおだもう	富山市・由来は、平安時代の武将である安倍宗任の子孫が、久安6年（1151年）に朝廷に献上品を納めた功績により土地を賜った」事に由来する。
21	鼠谷	よめだに	富山市・由来は、かつて野鼠が多く「ねずみだに」と呼ばれていたが、鼠の崇りを恐れた村人は「ネズミ様」と呼ぶようになり「鼠」という字を語感の良い「ヨメ（嫁）」と読み替えて「よねだに」になった
22	上仁歩	かみにんぶ	富山市・由来は、仁歩川の上流域に位置する事に由来する。
23	山女	あけび	魚津市・「山女」の地名には「やまめ」「やまおんな」「あけび」の3つの読み方があり、「やまめ」はサケ科の淡水魚、「やまおんな」は山奥に潜む女性の怪物を意味し、「あけび」はアケビ科の植物を指す。
24	蛇田	へんだ	魚津市・富山県に「蛇田」という地名の由来は確認できないが、岩手県石巻市には「蛇田」という地名がある。
25	田地方	でんじかた	魚津市・由来は、伊勢神宮領を治める差配役である東・西の田地方がいた事に由来する。
26	湖光	こうこう	氷見市・由来は、湖面の美しい光景に由来すると思われる。
27	蒲田	かわた	氷見市・由来には諸説あり、泥深い田があった場所や蒲（がま）が生えている田、アイヌ語の「カマタ」で、沼に浮かぶ島や飛び越えた場所を示すなどがある。
28	大覚口	おがくち	氷見市・由来については不明。
29	滑川	なめりかわ	滑川市・由来には複数あり、主なものは、海水が波になって川に入ってくる様子から「波入川」と呼ばれていたものが転じたという説や、鎌倉の滑川にちなんで名づけられたという説がある。
30	魚躬	うおのみ	滑川市・由来は、平安時代に「伊遠乃見」（いおのみ）と呼ばれていた事に由来する。「いおのみ」は「魚の海」を意味する。
31	寺家	じけい	滑川市・由来は、公家や武家と並び、中世から僧侶や神主を指す言葉として寺社が集まっていた事で「寺家（じいけ）」が使われた。
32	生地	いくじ	黒部市・由来は、久寿2年（1155年）の大津波で壊滅した新治村の住民が「生まれた土地に帰る」事を願い、また「新しい土地が生まれた」という意味を込めて「生地」と名付けられたという。
33	神谷	こんたに	黒部市・由来には複数あり、1つ目は、神谷の近くに梶原新田という地名があり、「カジハ」と略され、それがなまって「カニハ」が「かみや」となった説と、「蟹庭（カニハ）」と記された文献もある事から、荒川の周辺（神谷あたり）に蟹が多く生息していたからという説。
34	田家角内	たいがぐち	黒部市・由来は、はっきりしませんが、地形から付いたと思われる
35	古御堂	ふるんど	黒部市・由来は、富長村の南の大山山麓の台地にある御堂の跡が由来とされ、「御堂」は中慶寺（ちゅうけいじ）の事とする説があるが、

			「正保国絵図」などには「古見道」の字をあてる。
36	頼成	らんじょう	砺波市・由来は明確ではありませんが、中世の名田（みょうでん）に由来すると思われる。当時、この地域は徳大寺家の荘園であり、荘園を管理する荘官（公文）の役職名が小字名として残っている。
37	浅谷	あさんたに	砺波市・由来については不明ですが、この地名は他の県でも多くある。
38	高道	たかんど	砺波市・由来については不明。
39	石動町	いするぎまち	小矢部市・由来は、天正13年（1585年）に前田利秀が石動山の伊須流岐比古神社の虚空蔵菩薩を現在の石動地区に遷した事が起源という。その後利秀がこの地を「新しい石動」良い字意味で「今石動」と名付けた事に由来する。
40	小神	おこ	小谷部市・由来は、古代の氏族「オホ族」に関連すると思われる。小谷部川流域には「大野郷」と言った地名があり、これは「オホ族」の「オホ」が転訛し「小神（おほ）」となったと思われる。
41	犬内	いんない	射水市・由来は、当地の白山社の由緒によると、天正13年（1585年）に佐々成政の家臣の神保氏が守山城落城の際、日頃信仰していた院内村の白山社の神霊をこの地に移し、「院内」と名付けた事がゆらいで、その後に「犬内」となったと思われる。
	戸破	ひばり	射水市・由来は、昔、干ばつで水不足になった際に雨乞いをしたところ、戸が破れるほどの大雨が降ったという言い伝えや、泥沼の縁を田地割りした「辺割（へわり）」に由来するという説がある。
43	開谷	かいだん	中新川郡・由来には複数あり、1つ目は「貝の化石説」で、地層の貝の化石が多くみられる事から「貝谷」と呼ばれていたのが転じて「開谷」になったという説と、「寺院の戒壇説」で、源内坊という寺院があり、その戒壇（かいだん：仏教で僧侶が戒律を授かる場所）があった事に由来する説がある。
44	眼目	さっか	中新川郡・由来は、かつて「咲花」や「察花」と表記されていた。それが「眼目」になったのは、慶長12年（1607年）に前田利常が巡視した際、当地にある眼目山（がんもくさん）立山寺の由緒を聞き山号の「眼目」の文字を村名の「察花」と置き換え「さっか」と読ませた為という。
45	塩谷	しおんたん	中新川郡・由来は、アイヌ語の「シユーヤ」（鍋岩）が起源という。
46	大永田	おながた	中新川郡・永田の地名は、「長く拓けた田地」や「川沿いに長く大きな水田が続いていた」事に由来する。
47	湯神子	ゆのみこ	中新川郡・由来は、かつて一人の神子（みこ）がその他の湯に浸かったところ、湯が枯れてしまい、その跡地を開拓して村を作り「湯神子」と名付けたという伝説に由来する。
48	下田	みさだ	中新川郡・由来は複数あり、もともと農業集落であったこの地で、天正2年（1574年）に金が発見され、金山としても栄えた由来と、もう一つは、康治元年（1142年）頃に信濃から移住した伍島勘兵

			衛が開拓し、一村の草分けとなった事に由来する。
49	芦嶺寺	あしくらじ	中新川郡・由来は、かつてこの地にあった「雄山神社中宮祈願殿」という寺院の名称に由来する。この地域は、8世紀に佐伯有頼によって修行の場として創設された立山信仰の拠点として栄えた。
50	半屋	なかりや	中新川郡・由来は、水害の為に数回流出し、家数が半減する事が多かった事に由来する。
51	目桑	めっか	中新川郡・由来は、かつて桑の生育が良好で良質な繭（まゆ）が生産された事から「芽桑」と名付けられた、後に「目桑」に改められた
52	座主坊	ざしゅうぼう	中新川郡・由来は、永正年間に神明宮を造営した人が「座主坊」の出身であった事に由来する。「座主坊」とは、寺院を統括する最高位の僧職を言う。
53	上末	うわずえ	中新川郡・由来については不明。
54	婦負	ねい	富山市・由来は複数あり、姉倉比買神社や鶴坂神社と言った地域の古社に由来する説や、杉原神社のある杉原野の開拓伝承で、沼に落ちた女神を男神が背負って助けた事から「婦を負う」という伝承に由来する説がある。
55	沢連	そうれ	富山市・由来については不明。
56	柳川	やないご	富山市・由来は、柳の木が多い事からついた地名。
57	八尾町杉平	すがたいら	富山市・由来は、切詰（きりづめ）の開拓者が最初に杉の木を植えた事に由来する。
58	長川原	なんかわら	富山市・由来は、地形からついたと思われ、「長」は長いもしくは広範囲を意味し、「川」は水辺を指し、「原」は平坦な土地、野原を意味する可能性がある。
59	駒見	まみ	富山市・由来は、中世の「万見（まみ）保」に由来する。かつては「小万見」とも表記される。
60	地角	じかく	富山市・由来については不明。
61	持田	もちでん	富山市・由来については「餅田（もちでん）」・「圃田（ほしでん）」の遺名とも考えられる。
62	船嶺	ふなくら	富山市・由来は、縄文時代から続く古い地名で、「船嶺」という漢字は姉倉姫を祀る帝龍寺の山号「船嶺山（せんべんさん）」に由来する。
63	百橋	どのはし	高岡市・由来は、「百」を「ど」と詠む場合は、水が勢いよく流れる様を示す事があり、こうした点から橋の下を勢いよく流れる地を指すと思われる。
64	五十辺	いからべ	高岡市・由来は、館の内には、古代末期の大鳥城主佐藤基治の一族伊賀良目七郎高重の居館とされる「五十辺館跡」があり、村名も由来すると思われる。
65	三女子	さんよし	高岡市・由来は、「三好」という漢字を分割し「三女子」と表記し、読みを「みよし」とされたことに由来する。また、「よし」は葦（よし・あし）が生える低湿地によく使われる地名であり、「三女子」もかつては「庄川」の河原に続く葦原だったとされる。

66	勝木原	のでわら	高岡市・由来は、戦国時代にこの地に落ち延びて田畑を開いたとされる勝木原将軍にちなむという説がある。
67	下山	にぎやま	下新川郡・由来については不明。
68	東狐	とっこ	下新川郡・由来は、元和元年（1615年）の新開で、時の用水奉行東掃部が子狐を殺したところ、その親狐が仇を成した為、狐をなだめるためにここに堂を建て、東狐の宮と称した。これからこの村を「東狐」と呼ぶようになったという。
69	神子沢	みこざわ	下新川郡・由来は、「神子沢の伝説」があり、昔、この地に不思議な力を持つ美しい少女がいて、彼女は「神子（みこ）」と呼ばれ、村人たちの病気を治したり、困りごとを解決してとても慕われていました。 「神子の泉」では、神子がある日、山中で道に迷ってしまい、心細く思っていると、目の前に清らかな泉が現れ、その水を飲むとたちまち元気を取り戻し、道を見つける事が出来たという。「癒し水」は村人の病気や疲れを癒しており、村人たちは感謝の気持ちを込めて「神子沢」と呼ぶようになったという。
70	大平	だいら	下新川郡・由来ははっきりしませんが、一般的には「平和であるさま」を意味する地名。
71	五十里	いかり	高岡市・由来は、小矢部川下流左岸に位置し、古代の奈良東大寺領「伊加流伎庄」の移称地であるという説がある。五十里、道重、板屋、百橋の4つの村がまとまって村ができ、その中心が五十里でした

石川県



NO	地名	読み方	由来
1	相合谷町	あおだにまち	金沢市・由来については不明。
2	榎尾町	えのきおまち	金沢市・由来についてははっきりしませんが「榎」の木がその地名の背景にあるので、「榎」の木が多く育成していたと思われる。
3	大河端町	おこばたまち	金沢市・由来は、金沢平野を流れる浅野川の河畔に位置することから「大河の端（おおかわのばた）」が転じて名付けられたとされる。
4	大平沢町	おおひらそう まち	金沢市・由来は、もともと平坦な土地で日当たりが良く、きれいな沢水が耕作に適していた事から「日良佐和」と記されていたことが起源となった
5	鴛原町	おしはらまち	金沢市・由来は、かつてこの地域に「オシドリ」が生息する池があった事に由来する。この地名は、延宝3年（1675年）に「鴛ヶ原村」から「鴛原村」へと変更された。
6	蚊爪町	かがつめまち	金沢市・由来は、元禄15年（1702年）以前は「加賀爪」と表記されていたが、この年「蚊爪」に改められた。
7	稚日野町	わかひのまち	金沢市・由来ははっきりしませんが「日野」という地名は、耕作に適した肥えた地を意味すると考えられる。
8	山川町	やまごまち	金沢市・由来は、室町時代に加賀の守護であった富樫氏の重臣であった山川三河守がこの地に館を設けたことが「山川町」の起源という。
9	主計町	かずえまち	金沢市・辛いは、慶長期（1596年～1615年）に加賀藩の重臣であった富田主計重家（とだかずえしげいえ）がこの地に上屋敷を構えていた事にちなんで名付けられた地名。
10	金石	かないわ	金沢市・由来は、江戸時代末期に宮腰と大野村が合併した際「両地区の固い融和を願って「固いこと金石（きんせき）の交わり」という故事から名付けられたという。
11	大菱池町	おびしいけまち	金沢市・由来ははっきりしませんが、「菱池」という地名は、池で特産品の「菱の実（ひしのみ）」が採れた事に由来すると思われる。
12	折違町	すじかいまち	金沢市・由来は、付近を流れる鞍月用水に斜めに架けられた「折違橋（すじかいばし）」に由来する。この橋は、道が曲がっていたために斜めになっていたことから名付けられた。
13	子来町	こらいまち	金沢市・由来は、慶応3年（1867年）の卯辰山開発の際に、多くの住民の子供が来るようににぎやかなに坂を登ったことから「子来坂」と名付けられた。
14	御供田町	ごくでんまち	金沢市・由来は、かつて増泉にあった神田神社の神田であった事に由来する。「御供田」とは、神仏に供える米を作る田のこと。
15	問屋町	といやまち	金沢市・由来は、藩政時代に塩問屋が集まっていた事に由来する。藩政初期には、金沢城北側の大手門付近に塩問屋が集まっていたが、寛永年間（1624年～1644年）に現在の地へ移った。
16	中川除町	なかがわよけ まち	金沢市・由来は、かつて犀川（さいかわ）沿いにあった「川除け（堤防）」に由来する。古くは「犀川川除町」と呼ばれていた。
17	醒ヶ井町	さめがいちょう	金沢市・由来は、「目が覚めるようなきれいな討水の井戸があった事」

			に由来し、明治2年に町名となった。藩政時代には北広岡村領であり、前田土佐守の下屋敷があった場所。
18	十間町	じっけんまち	金沢市・由来は、開墾した土地に十軒の家があった事に由来する。
19	千木町	せぎまち	金沢市・由来は、神社の屋根にある飾り「千木(ちぎ)」に由来する。
20	伝燈寺町	でんとうじまち	金沢市・由来は、町内に位置する「伝燈寺」に由来する。この寺院は加賀国野々市城主であった富樫晴貞が、織田信長に味方した事で一向一揆方に責められ討死した寺院とされている。
21	四十万	しじま	金沢市・由来は、百済(くだら)から阿弥陀如来(または大日如来)が来た際、その地まで四十万里の距離があったという伝説に由来する
22	土清水	つしょうず	金沢市・由来は、開村以前に「土清水野」と呼ばれる原野で、湧き水が豊富だった事に由来する。
23	利屋町	とぎやまち	金沢市・由来は、江戸時代に刀鍛冶の名人がおり、刃物を研いだ滝が「研屋滝」と呼ばれ、その滝にちなんで一帯が利屋町と呼ばれるようになった。
24	長土堀	ながどへ	金沢市・由来は、加賀八家の長氏や村井氏などの武家屋敷の土堀が長く続いていた事に由来する。
25	三小牛町	みつこうじまち	金沢市・由来は、町内にある「三小牛山」に由来する。山には、金・銀・鉄の精が三匹の小牛となって現れたという説や、芋堀藤五郎が3つの金牛を埋めたという伝説もある。
26	間明町	まぎらまち	金沢市・由来は、「ま・あくら」が縮まって呼ばれるようになったという説がある。
27	動橋町	いぶりはしまち	加賀市・由来は、かつて「動橋川」に架かっていた橋が、人が渡ると揺れ動いた事に由来する。加賀地方の方言で「揺れ動く」ことを「いぶる」という。
28	直下町	そそりまち	加賀市・由来は、高い崖を直下から見上げた際に、垂直に立っているように見える事に由来する。
29	百々町	どどまち	加賀市・由来は、「とうとうと水が流れる様子」を表す言葉に漢字を当てたものと思われる。
30	大聖寺木呂場町	だいしょうじころばまち	加賀市・由来は、川を利用して運ばれた木材(木呂)を引き揚げる場所であった事に由来する。
31	大聖寺平床	だいしょうじひらとこ	加賀市・由来は、「大聖寺」は、白山信仰の中心地の一つであった寺院の地名で、「平床」の地名については、山林の多い加賀において「平らな台地が印象的だったので付いた地名かと思われる。
32	勅使町	ちよくしまち	加賀市・由来は、かつて花山法皇や一条天皇の勅使が滞在する場所があった事に由来する。
33	山中温泉片谷町	やまなかおんせんへきたにまち	加賀市・由来は、九谷ダムの人造湖(五彩湖)に沈んだ集落がダムの片側に位置した事に由来すると思われる。
34	真砂町	まさごまち	加賀市・大聖寺川上流の河谷に位置し、川原に「真砂(まさご)」と呼ばれる砂が多く見られる事に由来する。
35	大豆田本町	まめだほんち	金沢市・由来は、かつてはこの地域で大豆の栽培に適しており、「大豆

		よう	村」と呼ばれていた事に由来する。犀川（さいかわ）の氾濫による土壌が肥沃になり、大豆がよく育った為、米と同様に税金となる重要な作物であった大豆の名前が使われた。「大豆田」と書いて「まめだ」と読むのは、一般的に「まめ」を指す為です。
36	甥杉町	めおとすぎまち	金沢市・由来は、かつて薬用の「甥杉大根」産地であった事に由来すると思われる。
37	博労町	ばくろうまち	金沢市・由来は、藩政時代に馬の売買や藩士の稽古用の賃馬を飼育する「博労」達が住んでいた事に由来する。
38	三馬	みんま	金沢市・由来は、久安にある「御馬（みうま）」神社がこの地域の惣社であった事に由来する。
39	芳斉	ほうさい	金沢市・由来は、大阪夏の陣後に三代藩主前田利常に招かれた武将「青木新兵衛芳斉」がこの地に住んだ事に由来する。
40	米泉町	よないずみまち	金沢市・由来は、かつてこの地域が「泉野」と呼ばれた広野であり、そこから分かれて出来た村の一つである「泉村」に由来する。この地帯は自噴井地帯であったという。
41	安宅町	あたかまち	小松市・由来は、「異国人が襲来した海岸」を意味する（寇が浦（あだがうら））に由来する。
42	観音下町	かながそまち	小松市・石川県には「観音下町」という地名が複数存在するが、由来はそれぞれ違う。小松市の「観音下町」は、観音山の麓に位置し、山頂に観音菩薩像が安置されている事に由来する。
43	埴田町	はねだまち	小松市・由来は、「埴（はに）」という言葉が示す「きめの細かい、黄赤色の粘土」に由来する。「はにゆうだ」と発音される事もある。
44	小馬出町	こんまでまち	小松市・由来は、お城の馬場があり、出陣の際に馬が出て行った場所にちなむとされている。
45	池城町	いけのじょうまち	小松市・由来は、戦国時代に町内の最も高い山にあった鳥越城の出城と、その付近にあった池に由来する。
46	海士町	あままち	輪島市・筑前国鐘崎（現在の福岡県玄海町）から渡来した海士（あま）によって開かれた地域であり、潜水漁を中心とした漁業を営んでいた事に由来する。
47	門前町 五十洲	もんぜんまち いぎす	輪島市・由来は、当地で産出される海藻の「イギス」に由来する。
48	鳳至町	ふげしまち	輪島市・由来には複数あり、主なものは古くから「グゲシ」と呼ばれていた地名に、後から「鳳」と「至」という漢字が当てられ「鳳凰（ほうおう）が至る」という意味が生まれたという。
49	門前町窠	もんぜんまち うつろ	輪島市・門前町は、寺院や神社の門前で参拝者や観光客を対象とした宿屋や商業が発展し、形成された集落が大きくなったもので、「窠」という漢字の意味は、深い、奥深い、底知れないや、しとやかで美しいなど言う。
50	門前町百成	もんぜんまち どうめき	輪島市・由来については不明。

51	町野町真久	まちなま さんさ	輪島市・「真久」の地名は弘治3年(1557年)の古文書に登場されていますが、由来については不明。
52	珠洲	すず	珠洲市・由来には複数あり、主な説は収穫祭で振る神楽鈴の音に由来する説と、大伴家持が詠んだ歌にある真珠のように美しい「洲(くに)」に由来する説がある。
53	狼煙町	のろしまち	珠州市・由来には諸説あり、主なものはこの地域の灯台で狼煙(のろし)を上げていた事に由来する説と、難破船が三崎権現(現在の須須神社)に祈ると火が見え、海難を免れた事から「狼煙」という名前になったという説がある。
54	宝立町	ほうりゅうまち	珠州市・由来は、町の北方にある宝立山(ほうりゅうざん)に由来。
55	栢野町	かやのまち	加賀市・由来は、菅原神社にある「栢野の大杉」に由来する。この大杉は、一本で百本に匹敵する価値があるとして、養老年元(717年)に泰澄大師が建立した「栢野寺」の名が付けられた。
56	七日市町	なんかいちまち	加賀市・由来は、毎月7日の定期的に市が開催されていたことに由来する。
57	分校町	ぶんぎょうまち	加賀市・由来は、班田制における校田(こうでん)に由来するという説が有力です。「校田」とは、古代の土地制度である班田収授制において、田地な増減や変動を調べるための土地を指す。
58	羽咋町	はくいまち	羽咋市・由来は、神話に由来し昔、この地域に現れた怪鳥を「磐衝別命(いわつくわけのみこと)」という皇子が3匹の犬とともに退治し、その犬が怪鳥の羽を喰った(はをくった)事から「羽咋町」という地名が出来たという。
59	柳田町	やないだまち	羽咋市・由来についてははっきりしないが、古くからある地名です。「日本歴史地名大系」によると、柳田村は町野川と上町川の合流点を東端とし、町野川上流に広大な村域を有していた。応安6年(1373年)には「柳田村白山宮」の記述があり、永正4年(1507年)には「柳田法祐入道」の名が見られる。
60	中島町外	なかじままち そで	七尾市・「外」の由来は、近世に能登天領(徳川幕府領)に属していた事に由来する。
61	行町	あるきまち	白山市・由来は、足を動かし前に進む様子を言葉で表した地名。
62	尾添	おぞう	白山市・由来は、白山信仰と関係する地名と思われる。
63	相川町	そうごまち	白山市・由来は、大川と倉部川に挟まれた地域である事から、「相對した川」という意味で名付けられた地名と思われる。
64	木滑	きなめり	白山市・由来は、木々が生い茂る滑らかな地形や、木材が滑り落ちるような場所を指して付いた地名か。
65	河内町下折	かわちまち そり	白山市・由来についてははっきりしない。
66	木津町	こうづまち	白山市・一般的に「木津」という地名の由来は、「木材の津(港)」を意味する。
67	灯台笹町	とだしのまち	能美市・由来は、明治初期に手取川を渡る舟渡場があり、山の上にあ

			った常夜灯の「灯台」と、川原に繁っていた「笹」に由来する。
68	筋生町	あんぞまち	能美市・由来は、「筋（あざみ）」に関係すると思われる。かつてこの地域に「アザミ」が多く生い茂っていた事に由来すると思われる。
69	粟生町	あおまち	能美市・由来は、「粟生弥七郎」という人物が湯口村と北尾村の2村を合わせて「粟生村」と名付けた事に由来する。
70	末寺町	まつじまち	能美市・由来は、寺院に関連した可能性が高いが、具体的な起源は不明。
71	矢作	やはぎ	野々市市・由来は、中世に矢を作る人が住んでいたという説と、近世に破魔矢の生産地であった為という説がある。
72	代田	しなんだ	羽咋郡志賀町・由来ははっきりしませんが、「代田」という地名は、苗を植える前の水が張られた田んぼの状態を指す「代田（しろた）」に由来する説や、日本各地に伝わる巨人「ダイグラボッチ」の伝説に由来する説などがある。
73	灯	とぼし	羽咋郡志賀町・由来は不明ですが「灯」の付く地名として「伝燈寺」がある。
74	仏木	ほとぎり	羽咋郡志賀町・由来は、総持寺の第2代住職である峨山禅師が賊に襲われた際、懐の仏像が身代わりになったという伝説に由来する。かつては、「仏切」と表記されていましたが、現在は「仏木」という漢字が当てられた。
75	子浦	しお	羽咋郡宝達志水町・由来は、中世の志雄荘や志雄保に由来すると思われる。元禄14年の報告書によると、たび重なる火事により村名に由来しているとして、明暦年間に「子浦」に改称された。
76	竹生野	たこの	羽咋郡宝達志水町・由来ははっきりしませんが、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である「竹生野遺跡」がある。特に、弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡が主体です。
77	一青	ひとつと	鹿島郡中能登町・由来は、かつてこの地域の低湿地や湖沼に生息していた「ひとつと」という青い毛の鳥に由来する。この「ひとつと」が転じて「ひとつ」となり地名となった。
78	廿九日	ひずめ	鹿島郡中能登町・由来は、承応2年（1653年）に新庄村と在江村の新開地として開拓された際に根付けられた。
79	甲	かぶと	鳳珠郡穴水町・由来は、明治初期の地租改正時に、土地の区画整理のために機械的に割り振られた地番に由来する。石川県では、「イロハ、甲乙丙、十二支、儒学用語などが地名として使われている地域もある
80	宇出津	うしつ	鳳珠郡能登町・由来には諸説あり、小港を意味するアイヌ語の「ウシユリ」が転訛したという説と、「大（うし）津」に由来するという説がある。但し、アイヌ語説は根拠に乏しい。
81	上町	かんまち	鳳珠郡能都町・一般的に「上町」という地名は、高台や中心部に位置する事に由来する。
82	四方山	よもやま	鳳珠郡能都町・由来ははっきりしませんが、四方が山に囲まれた地ではないかと思われる。

83	小間生	おもう	鳳珠郡能登町・由来は、中世の「間人（まびと）」に由来する。「こまう」と発音する場合もある。
----	-----	-----	---

福井県



NO	地名	読み方	由来
1	浅水	あそうず	福井市・由来は、古くから水に関連する様々な表記で文献に登場し、「朝津」「浅瀬」「浅水」「朝津」「麻生津」と言った表記が時代と共に変化しながら使われてきた。
2	大丹生町	おにゅうちょう	福井市・由来は、古代に辰砂（水銀の原料）が産出した、または水銀の精錬に関わる人々が住んでいたことに由来する。
3	下一光町	しもいかりちよう	福井市・由来は、伝説によると生い茂る古木の中、正午にだけ差し込む一筋の光からついた地名で、太古の原風景が由来。
4	下天下町	しもてがちょう	福井市・由来は、かつて養蚕が盛んであった事から「蚕種（さんし

			ゆ)の天より下りたる所を天賀(ていが)という」伝承に由来する。
5	曾万布町	そんぼちょう	福井市・由来は、平安時代に成立した「曾万布荘」という荘園名に由来する。平安時代に藤原家が曾万布の荘園の領地とし、氏神である春日神社を祀った事が始まりという。
6	花堂町	はなんどうちょう	福井市・由来は複数あり、花御堂説では、昔この地域に処刑場があり、罪人を供養するために建てられた花御堂(はなみどう)に由来する説と、北の庄城下の端説では、古くは「花之堂」と書かれ、北の庄城下の端(はな)にあたる道であった事から「端道(はなみち)」が転訛して「花ン堂」になった説、埴輪・端の佳字化説では、足羽山の南に位置し、古墳が多く見られる事から、「花」は埴輪の「埴」や「端」の縁起の良い文字に置き換えられたという説。
7	甑谷町	こしくだにちょう	福井市・由来は、穀物を蒸すための土器である「こしき」が生産されていた事に由来する。
8	椚谷町	すいだにちょう	福井市・由来については不明。
9	越廼	こしの	福井市・由来は明確ではありませんが、当時の人々に厚く信仰されていた霊山である越知山の西に位置した事から「越の西」を「越廼」と書き表した事に由来する。
10	下蒔生田町	しもあぞうだちょう	福井市・由来ははっきりしませんが、字句から推測すると「アザミ」が多く茂っている地域と思われます。
11	主計中町	かずえなかちょう	福井市・由来は、律令制における官職の一つである「主計寮」という官職名に由来する地名。
12	足羽	あわす	福井市・由来は複数あり、主なものは古代の神名「阿須波(あすは)」に由来する説と、地形や信仰儀礼に由来する説もある。
13	謡谷町	うたいだにちょう	福井市・由来は、この地には北朝方の武将である細川頼之の奥方と、南朝方の武将である狩野貞長の間に生まれた幼い娘が住んでいた。娘は両親の対立に心を痛め、毎日悲しい歌を歌いながら谷をさまよっていた。ある夜、娘はついに心を病んで谷底に身を投げてしまった。これが「謡谷」の由来という。
14	和布町	めらちょう	福井市・由来については不明。
15	獺ヶ口町	うそがくちまち	福井市・由来ははっきりしませんが、獺(カワウソ)が生息に関わる民話や伝説に関係があると思われる。
16	樽野町	とがのちょう	福井市・由来は、朝倉氏の家臣であった「樽野氏」がこの地の苗字にした事に由来する。地名自体は、地形や埴生に関連する。
17	乾徳	けんとく	福井市・由来については不明。
18	愛発	あらち	敦賀市・由来は、古代に北陸道に設置された「愛発関(あらちのせき)」に由来する。「愛発関」は、東海道の鈴鹿関、東山道の不破関と共に「古代三関」の一つで、都への侵入を防ぐ重要な関所。
19	獺河内	うそごうち	敦賀市・由来は、天正11年(1583年)の賤ヶ岳の戦いで敗れた落武者が、獺(かわうそ)に魅せられて川をさかのぼり、平地を見つけて定住した事に由来する。

20	小河	おご おごう	敦賀市・由来は、小河川の谷間に位置し、「小川」とも書かれた事に由来する。
21	御名	ごみょう	敦賀市・由来は、第14代仲哀天皇がこの地に行幸された際、農民が御饌（みけ）（食事のこと）を捧げた休憩地であった事に由来するという伝承がある。この地は景勝地であり、かつては山林で、後世に里人がこの御座所に社殿を建て、天皇を祀ったと伝えられる。
22	杉津	すいず	敦賀市・由来は、鎌倉時代には「水津」と表記され、水辺（海浜）の港を意味する「水津」に由来し、後に「杉津」の字が当てられる。
23	黒河	くろこ	敦賀市・由来は、黒河川という川の存在に由来する。
24	角鹿町	つのがちょう	敦賀市・由来には複数あり、主なものは「古事記」では応神天皇の夢に現れた神とイルカの贈り物にちなむ説と、「日本書紀」では額に角を持つ「都怒我阿羅斯等（つのがあらしと）」という人物が渡来した事に由来する説がある。
25	長沢	ながそ	敦賀市・由来は、郡界川に沿って長い沢をなす地形にちなむ。この地名は南北朝時代から存在し、貞和2年（1346年）の文章に「長沢」の地名は見られる。
26	縄間	のうま	敦賀市・由来は、延暦年間（782年～806年）に八幡大神の神霊が名子浦に出現し、現在の縄間に御幸された際、人々が注連縄を引いて浄域を作り、「そこに殿を建てて信仰した事に由来する。
27	花城	はなじり	敦賀市・福井県には「花城」という地名は複数あり、敦賀市の方は気比松原の西端の地名であり、かつて雁が飛来する「花城落雁」として敦賀八景の一つに数えられる。「落雁」とは、雁が夕方ねぐらに帰るために集団で飛び去る光景を指す。
28	蒔生野	あぞの	敦賀市・由来は、中世には「蒔生保」（あぞのほ）として存在し、鎌倉時代から戦国時代にかけてその地名が見られる。字句から創造するに「蒔」（あざみ）が茂る野原から付いたと思われる。
29	相生町	あいおいちょう	敦賀市・由来は、昭和31年（1956年）に複数の町の一部を編入して成立した町名で、元は敦賀市幸、大金、末広、晴明、蓬名の一部
30	鉄輪町	かなわちょう	敦賀市・由来については不明。
31	鞠山	まるやま	敦賀市・由来は、貞享4年（1687年）に小浜藩の支藩である敦賀藩（別名：鞠山藩）の陣屋が築かれた際に、それまでの「塩込（しおこみ）」から改称された事に由来。
32	疋田	ひいだ	敦賀市・由来は、藤原利仁の孫である疋田為頼に由来する。疋田は古くから交通の要衝であり、琵琶湖と日本海を結ぶ運河計画の一部が実現した舟川の歴史もある。
33	生守	いごもり	小浜市・由来については明確な情報はないが、中世から村として存在し、文明7年3月19日の妙楽寺寄進札に「願主生守忠四郎」とあり、「生守家」があったから付いた地名と思われる。
34	雲浜	うんぴん	小浜市・由来は、かつて砂浜に干された漁網がくもの巣のように見えた事から「蜘蛛の浜」と呼ばれ、それが転じて「雲浜」となった。

35	奥田縄	おくだの	小浜市・由来は、かつて「須(す)」「奥田(おくだ)」「口田(くちだ)」という三つの村が、それぞれの村にある滝の高さを「縄」で測り、地村の滝が国一番だと主張し合った民話に由来する。
36	遠敷	おにゅう	小浜市・由来は、古代には「おにふ」と呼ばれ「小丹生」と表記していたが、8世紀初頭に「遠敷」の漢字が当てられた。この変更は、和銅6年(713年)に好字二字令(地名を2文字に統一する詔)によるものと推測される。
37	上根来	かみねごり	小浜市・由来は、和歌山県の根来寺の再興祖である「根来坊」に由来する。小浜市には「上根来」と「下根来」がある。
38	竹原	たわら	小浜市・福井県には「竹原」という地名は複数あり、由来は地域により異なる。小浜市の竹原は、鎌倉時代から尊命として記録されている
39	谷汲	たにくみ	小浜市・由来は、谷の岩の間から油(石油)が湧き出て、それを灯明に使ったという言い伝えに由来する。また、谷の奥まった場所を指す「たにくま(谷隈)」や、谷が入り組んだ地形を指す「たにこも(谷籠)」が転じて「谷汲」になったという説もある。
40	釣姫	つるべ	小浜市・由来は、中世の「多烏浦(たがらすうら)」という浦名に由来すると考えられる。
41	東市場	というば	小浜市・由来は、遠敷(おにゅう)市庭の東に市が立つ事に由来。
42	法海	のりかい	小浜市・福井県には海や水にまつわる様々な伝説がある。「法海」という地名の由来についての伝説は見当たらない。
43	阿難祖地頭方	あどそじとうほう	大野市・由来は、中世の土地制度における「地頭方」に由来し、かつて「阿難祖領家」と対をなす地域であったと思われる。「地頭方」という地名は、中世に荘園や公領を管理した「地頭」が支配した土地を指します。
44	西勝原	にしかつはら	大野市・由来は、「片側だけが開けた野原」を意味する「勝原」に由来すると思われる。また、「カズハラ」(葛原)が語源で、マメ科のつる草が生えていた土地にちなむという説もある。
45	中据	なかしがらみ	大野市・由来は、鎌倉時代の1306年には「据郷(しがらみごう)」として存在している。その後、17世紀には中据村と下据村に分かれたという。
46	丁坂	ようろうざか	大野市・由来は、かつて「よぼろざか」と呼ばれ「尼僧がよぼろひつつ越えた坂」という伝承に由来する。「丁(ようろ)」とは、朝廷の労役に従事した人を意味し、その人が住んだ土地であった事にちなむ
47	糸魚町	いとよちょう	大野市・由来には、かつて市内の河川に「イトヨ」という名の魚が多く生息していたことに由来する。
48	清水	しょうず	大野市・由来は、志津川と日野川の合流点に位置し、水山と呼ばれる山の麓から「清水」が湧き出ていた事に由来する。
49	蕨生	わらびよ	大野市・由来ははっきりしませんが、植物の「蕨(わらび)」に関係していると思われる。
50	下若生子	しもわかご	大野市・由来は、上古大和時代に大若子命が国を平定し、その功績を

			称えて「若生子」(わかご)の地名が与えられた事に由来する。
51	下丁	しもようろ	大野市・由来は、三人の尼僧が、T形の杖をつき、よろよろとよろめきながら降りて来た土地だからという。
52	篠座	しのくら	大野市・由来は、かつて周辺一面を覆っていたササ竹(篠)に神が宿るとされ、それが由来という。
53	富嶋	とびしま	大野市・由来ははっきりしませんが、一般的な意味合いから「富」は豊かさ、恵み、繁栄を意味し、「嶋」は土地が水に囲まれた場所や、小高い場所を指します。
54	遅羽町嶮崎	おそわちようほうき	勝山市・由来は不明ですが、自然の地形に由来するものと思われます特に「崎」という漢字は、岬や突き出た場所を指す言葉を表す。
55	遅羽町蓬生	おそわちようよもぎ	勝山市・由来で「遅羽」は荘園名「遅羽荘」に由来し、「蓬生」は九頭竜川の渡し場である蓬生坂に由来する。この地域は「平泉寺」の勢力が強く、九頭竜川が障害となっていたため、中央の支配が及びにくく、大野との繋がりが強い地域。
56	野向町聖丸	のおきちようひじりまる	勝山市・由来は、蓮如上人の幼名である「聖丸」にちなんで名付けられた地名。
57	南井	なおい	鯖江市・由来は、文殊山の南麓に位置している事に由来する。
58	糺町	ただすちよう	鯖江市・由来は、南北朝時代に後醍醐天皇の皇子である護良親王が越前に滞在した際、この地から神を移して祀り「糺明神」と呼んだ事に由来する。
59	芦原	あわら	あらかわ市・由来は、芦原温泉に由来し、元々は湿地帯を意味する「あわら」という言葉に漢字を当てたもの。
60	櫛	くにぎ	あらかわ市・由来は諸説あり、「国木」(くにぎ)説では、昔から薪や炭の材料として広く全国的に使われていた「国の木」と呼ばれたものが変化したという説と、「食之木(くのき)」説では、葉がクリの葉に似ている事から「栗似木(くりにぎ)」が転訛した説、ドングリが食用になったことから「食之木(くのき)」と呼ばれたものが変化したという説がある。
61	谷畠	たんばく	あらかわ市・由来は不明ですが、「鼻」が付く地名は、海岸線に沿って海に突き出た地形が由来する事は多い。
62	不老町	おいずちよう	越前市・由来は、不老神社の境内に湧き出る霊水を飲んだ皇子が19歳の長寿を保ち、その容姿が若々しかった事から「不老の皇子」と呼ばれ、この地が「不老の里」と呼ばれるようになったという伝承が由来という。不老神社は当初は白山神社と呼ばれ、天平年間の創建で、明治42年に「不老神社」と改称した。
63	北府	きたご	越前市・由来は、北陸街道沿いの府中町の北部にあり、「北国府」を意味するとされている。
64	朽飯町	くだしちよう	越前市・由来には諸説あり、主なものは旅人が腐ったおにぎりを食べて腹を下した事から「くちるめし」「腹くだし」が転じて「くだし」となった説と、朝鮮半島の百濟(くだら)から渡来した人々が住み着い

			た事で「くだら」がなまって「くだし」となったという説がある
65	余田町	はぐりちょう	越前市・由来は、無足田は収益がほとんど得られない地味の低い田を意味し、この無足田の地が余田村となったという。
	丸岡町長畝	まるおかちょうのうね	越前市・由来は、古代の「和名抄」に記載された「長畝郷（のうねごう）」に由来すると言われ、東西に長い幾つかの尾根が平行しているためと思われる。
67	轟	どめき	吉田郡・由来は、大雨の際に九頭竜川と犀川が合流する付近で発生する大きな音（轟音）に由来する。
68	大玉	いかだま	丹生郡・由来は、北陸地方や静岡県では「大きい」事を「イカイ」とか「イカツイ」と表現するので、そこから付いた地名か。
69	大樟	おこのぎ	丹生郡・由来ははっきりしませんが、かつてこの地域に大きなクスノキ（樟）があった事に由来すると思われる。
70	左右	そう	丹生郡・由来は、「左は磯」「右は崖」「海鳥の声」「海山の道」と言った地形的特徴するように、海に面した険しい地形が由来する。
71	菜原	ぐみわら	丹生郡・福井県には「菜原」という地名は複数存在する。由来については不明ですが、慶長3年（1598年）に記載された「越前府中郡在々高目録」には「クミ原村」として記載されている。
72	笈松	おいまつ	丹生郡・由来は、「松」に似た発音の地名に「松」の漢字を当てた端祥地名である可能性が高い。
73	厨	くりや	丹生郡・由来は、台所を「厨（くりや）」という。
74	新庄	しんじょ	三方郡・由来は、古代の荘園制度に由来する「新庄」から派遣したと考えられる。この地域は、耳川の中流から上流域に位置し、7つの集落（田代・寄積・奥・馬場・岸名・浅ヶ瀬・奥）の総称。
75	日向	ひるが	三方郡・由来は、宇波西神社の祭神がこの地に現れた際、九州の日向国にある橋坂山（はしざかやま）の景観に似ていた事から根付いたという伝承がある。
76	五十谷	いさだに	三方郡・由来については不明ですが、弘法大師の杖の伝説が有名です
77	下車持	しまくらもち	大飯郡・由来については不明。
78	子生	こび	大飯郡・由来は、かつて立石村の木津刑部が熊野権現に祈願して授かった子が、大蛇に呑み込まれた子が無事に戻って来た事から「子生村」と名付けられたという伝説が由来。
79	小黑板	おぐるい	大飯郡・由来については不明。
80	蒜島	ひるばたけ	大飯郡・由来については不明。
81	名田庄田終	なたしょうのたおい	大飯郡・由来は、平安時代末期に成立した荘園「名田荘」で、「名田庄」の終わる所を意味する「名田終」が転訛したもの。
82	無悪	さかなし	三方上中郡・由来は、平安時代の歌人である小野篁（おののたかむら）が詠んだ「無悪善（さがなくば、よからん）」という句に由来する
83	塩坂越	しゃくし	三方上中郡・由来は、かつて各浦で獲れた魚や塩がこの地を經由して運ばれた事に由来する。中世には、水月湖に面する東の海山を「水坂越」（みずさこし）、海に面するこの地を「塩坂越」と呼んだ。

84	武生	むしゅう	三方上中郡・由来は、奈良時代から平安時代にかけて越前国府が「たけふ」と呼ばれていた事に由来する。鎌倉時代頃から武士の力が強まると国衙が衰退し「府中」と改められ、その後、明治時代に再び「武生」の地名となった。
85	玉置	たまき	三方上中郡・由来は、古代の玉置郷にあり、藤原宮木簡では「玉杵」や「手巻」、平城宮木簡では「玉杵」や「手枕」と表記されている。
86	海士坂	あまさか	三方上中郡・由来は、「山を越えて田烏（たがらす）から海士（漁師）が水産物の商売に来た事に由来する。

山梨県



NO	地名	読み方	由来
1	右左口	うばぐち	甲府市・由来には諸説あり、一つは左口神社説で、地域を守る佐口神社が、昔「うさんぐちさん」と呼ばれており、それが「うさぐち」を経て「うばぐち」に訛ったという説と、宿場説では、甲府から駿河へ向かう際、左右口を過ぎると峠道になり、乳飲み子を連れてゆくのが大変だった為、宿場にいた「乳母」に由来するという説がある。
2	国玉町	くだまちょう	甲府市・由来は、甲斐国第三宮である国玉明神（現在の玉緒神社）が国魂（くにたま）神社を祀っていた事に由来する。
3	金手	かなんて	甲府市・由来は、曲がった物差しである「曲尺（かねじゃく）」に由来する説や、「鍵手」（かぎのて）が訛ったものと云う説がある。
4	黒平町	くろべらちょう	甲府市・由来には複数あり、一つは土の色が黒かった事に由来する説と、黒戸奈（くろとな）神社の社地であった為「くろとな」が転じて「くろべら」になったという説がある。
5	石和町	いさわちょう	笛吹市・由来は、「いし（石）」と「さわ（沢）」が組み合わさったもので、「石が多く存在する沢」あるいは「湧き水のある沢」を意味する。
6	百々	どうどう	南アルプス市・由来は、御勅使川の水の流れる音に由来する。
7	荊沢	ばらざわ	南アルプス市・由来は、茨（いばら）が生い茂る沢地であったと思われる。
8	野牛島	やごしま	南アルプス市・由来は、古くは野牛島村として成立しており、近世まで遡る歴史のある地名です。
9	曲輪田	くるわだ	南アルプス市・由来ははっきりしませんが、「曲輪」という言葉は城郭の防御施設を指す事から、かつてはこの地域に城郭やそれに類似した施設があったと思われる。
10	猪丸	いまる	上野原市・由来は、「猪」の文字があるので、イノシシが多く生息していたか、イノシシによる被害が多かった地域と思われる。
11	四方津	しおつ	上野原市・由来は諸説あり昔鹿留（ししどめ）という地名が、郷の境に位置した事から、所領・土地の東西南北の境界を指す四至（しし）を当てて四方津（しおつ）になったと考えられる。
12	柵原	ゆずりはら	北都留郡・由来は、「譲り葉」（ゆずりは）に由来する。
13	禾生	かせい	都留市・由来は、この地域に良質な田んぼが多く、稲（禾生）が良く実った事に由来する。
14	忍草	しばくさ	南都留郡・由来は、元々「渋草」と表記されていた地名で、湿地や木陰に密生する土地を意味する。しかし、「渋」が枯れるに通じるため、後に「忍」の字をあてたという。
15	塩山西広門田	えんざんかわだ	甲州市・「西広門田」の読みは「かわだ」で、この読みは、古くは「川田」や「河田」と表記した事に由来する。また、「広」は「カハラ」「門田」は和歌などで「タ」と詠んだことから「カワダ」となったという説がある。
16	福生里	ふくおり	甲州市・由来は、慶長古高帳に「ふくう里」と記されており、重川の支流である竹森川の中流沿いに位置する狭い土地を指す。

17	大和町 初鹿野	やまとちょう はじかの	甲州市・由来は、「古事記」に登場するタケミナカタがこの地で初めて鹿を捕らえた事に由来する。
18	切差	きっさ	山梨市・由来には複数あり、主なものは地形的に霧が深く「さす」ことから「霧指」（きりさす）と呼ばれ、後に「切差」に転じたという説と、戦国時代の激戦地であった事から、刀で「斬ったり」「刺したり」した事に由来する説がある。
19	上神内川	かみかのがわ	山梨市・由来は、中世に「神内川郷」という地域に含まれていた事に由来する。
20	上祖母石	かみうばいし	韮崎市・由来については不明です。
21	円野町 入戸野	まるのまち にっこの	韮崎市・由来は、甲斐源氏の一族であり、後に武川衆の構成員となった入戸野氏の本貫地であった事に由来する。
22	須玉町 大豆生田	すたまちょう まみょうだ	北杜市・由来は、かつて米が取れなかった土地に大豆を植えた田んぼを「大豆田」（おおまめだ）や「大豆生田」（おおまめうだ）と呼んだ事に由来する。須玉町では「まみょうだ」と読まれる。
23	上教来石	かみきょうら いし	北杜市・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の際に腰掛けたとされた巨石に由来する。元々は「経て来石（へてこうし）」と呼ばれていたが「経」が「教」と誤記され、現在の「教来石」になったと伝えられる。
24	飯喰	いっくい	中巨摩郡・由来は、武田信玄が築いた信玄堤の工事に携わった人々がこの地で炊飯したという説と、信玄自身が視察の際に昼食をとった事に由来する説がある。
25	黒桂	つづら	南巨摩郡・由来は、戦国時代から江戸時代にかけて開発された金山に由来する。
26	薬袋	みない	南巨摩郡・由来には複数あり、武田信玄にまつわる伝説では、武田信玄が落とした薬袋を農民が届けた際「中を見たか」と問われた農民が「見ない」と答えた事から、信玄が「薬袋」と書いて「みない」と読む名字を与えたという説と、若者の悲恋物語では、京から来た若者が高貴な姫を追いかけてこの地に至り、姫の行方を訪ねたところ、土地の者が「見ない」と答えたため、若者が悲嘆して薬袋を破り捨てたという伝説がある。
27	楮根	かぞね	南巨摩郡・由来は、「楮」（こうぞ）の木が生い茂る林の端、つまり森の隅を指す言葉が語源という。「楮」は破れにくく耐久性のある和紙の原料として古くから日本で使われて来た植物です。
28	春米	つきよね	南巨摩郡・由来は複数あり、古代の「春米部」（つきよねべ）に由来する説や、中世の城の米をついた事に由来するという説がある。 また、全国の「ツキヨネ」という地名が山麓や崖の上の微高地に位置する事から、地形に由来するという説もある。
29	西尾連	しびれ	西八代郡・地名は、「四尾連湖（しびれこ）」に由来し、湖に住むとされる「尾崎龍王」という龍神が4つの尾を連ねているという言い伝えに由来する。この湖は別名「志比礼湖」や「神秘麗湖」とも表記される

長野県



©ONE COMPATH

NO	地名	読み方	由来
1	篠ノ井 御幣川	しののい おんべがわ	長野市・由来は、主に灌漑用水路工事中に発見された黄金の幣（ぬき）に由来する。この幣には「八幡宮」の文字が刻まれており、村人は「これは神のお告げ」と信じ、幣川神社を創建し、村の西を流れる川を御幣川と名付けた事が地名の語源という。
2	鬼無里	きなさ	長野市・由来には諸説あり、主なものは「鬼のいない里」を意味すると言うもので、これは「鬼が退治された事で、鬼がいなくなった里になった」という伝説に基づいている。
3	伺去	しゃり	長野市・由来には諸説あり、西行法師伝説や仏舎利に由来する説がある。西行法師説は、西行法師が飯縄山を訪れた際に詠んだ歌に由来するという説。
4	塩生甲	しょうぶこう	長野市・由来については不明。
5	住良木	すめらぎ	長野市・由来は、天皇や皇室を指す「すめらぎ」に由来する。この地域は明治初期に「青木村」と「奈良井村」が合併して成立した。
6	鑪	たたら	長野市・由来ははっきりしませんが、「鑪」の意味は、砂鉄を原料とする日本独自の製鉄炉やその作業場を指すので、それに関連した地名と思われる。
7	問御所町	といごしょま ち	長野市・由来は、鎌倉時代に町内にあった信濃国国衙（後丁）の守護所「豊御所」に由来する。古くは豊御所と表記され、源頼朝が善光寺参詣の際にこの御所で休んだ事に起因すると伝えられる。
8	氷鮑	ひがの	長野市・由来は、主に氷鮑斗売神社の祭神である宇都志日金柝命（うつしひがなさくのみこと）の「ひかな」に由来する説と、「川の流れる湿地帯」という地形という説がある。
9	檀田	まゆみだ	長野市・由来ははっきりしませんが、この地域は古くから人々との生活の場であり、縄文時代からの集落跡がある。
10	御厨	みくりや	長野市・由来は、明治8年（1875年）に戸部村と布施村が合併した際、この地が伊勢神宮の「御厨（みくりや）」と呼ばれる神領であった事に由来する。
11	上庭	じょうてい	長野市・由来については不明。
12	茂菅	もすげ	長野市・由来は明確には分りませんが、中世には葛山郷横棚村と呼ばれていた。「茂菅」という地名が初めて文献に登場するのは、慶長7年（1602年）の「川中島四郡検地打立之帳」です。
13	七二会	なにあい	長野市・由来は、明治9年（1876年）に7つの村と2つの枝村が合併した事に由来する。
14	寂蒔	じゃくまく	千曲市・由来は、慶長7年（1602年）の文献に「寂五蒔村」（ざくまくむら）と記されているのが初見という。
15	鑄物師屋	いもじや	千曲市・由来は、往古鑄物師がこの地を訪れ、村を開拓して代々鑄物師で生計を立てていた事が村名になった。
16	蓼科	たてしな	茅野市・由来は、「蓼」（たで）という水辺に咲く植物と、「科」（しな）という段差や窪地を意味する言葉の組み合わせ、あるいは「科の

			木」に由来するという説がある。
17	安曇	あづみ	松本市・由来は、古代に北九州を拠点としていた海人族である「安曇氏」（あづみし）が、大和朝廷の勢力拡大と共に東日本のこの地に移住し定着した事に由来する。
18	赤怒田	あかぬた	松本市・由来は、1629年の検地で「赤怒田村」が初めて成立した事による。それ以前は錦部郷の一部であり、苅谷郷に属していた。
19	出川	いでがわ	松本市・由来は、東側に流れる田川と豊富な湧き水に由来する。中世までは高原瀬と言われていた。
20	稲核	いねこき	松本市・由来は、野麦街道の宿場として機能した旧稲核村（明治7年に合併して安曇村誕生）に由来する。
21	埋橋	うずはし	松本市・由来は、古代の土器（埴）が埋まっていた事に由来する。「埋埴」（うずはね）が転訛して「埋橋」となった。
22	稲倉	しなくら	松本市・由来は、この地域は古くから稲作が盛んであった事が示唆すると思われる。
23	下原	しもっぱら	松本市・由来は、かつて「原之郷」と呼ばれていたが、江戸時代初期に「上原」「中原」「下原」に分かれた。
24	雪中	せっしょう	松本市・由来は不明です。
25	惣社	そうざ	松本市・惣社の由来は、平安時代に、国司が任地内の神社を巡拝する手間を省くため、特定の地域内の神社の祭神を一か所に集めて祀った神社の事で、国府の近くに惣社を設けた。
26	安曇沢渡	あづみさわん ど	松本市・由来は、安曇の飛驒と信州を結ぶ中継地点であった事から「沢を渡る」場所とされた事に由来する。
27	筑摩	つかま	松本市・由来は、古くは「つかま」と読まれ「ツカ（高くなった所）」と「マ（接続語）」に由来する。
28	奈川渡	ながわと	松本市・由来は、奈川と梓川の合流地点に奈川渡ダムが建設された事に由来する。この地域には「・渡」という地名が多く見られ、川の合流点を示す事が多い。
29	三才山	みさやま	松本市・由来は、諏訪郡から御射山（みさやま）社（御射神社秋宮）を勧請した事に由来する。
30	水汲	みずくま	松本市・由来は、多くの人々が水を汲みに訪れた事に由来する。この地域には、豊富な湧き水あり、遠方からも多くの人々が水を汲みに来ていた。
31	八景山	やげやま	松本市・「八景」という地名は、一般的にその土地の美しい景色を八つ選んで付けたもの。
32	和	かのう	東御市・由来は、1876年に複数の村が合併して「和（かのう）村」が発足した。
33	牧家	ぼくや	東御市・由来は、かつて「牧家」という屋号を持つ家系が営んでいた商売に由来すると思われる。
34	新張	みはり	東御市・由来は、古来の官牧である「新張牧」（にいはりまき）に由来する。「にいはり」が転訛して「みはり」になった説と、見張りを行っ

			ていた事に由来する説がある。
35	本海野	もとうんの	東御市・由来は、奈良時代の天平年間（729年～749年）に「信濃国小県郡海野郷」として記録が残っており、この地域を治めていた「海野氏」に由来すると思われる。
36	鹿教湯温泉	かけゆおんせん	上田市・由来は、「鹿が教えてくれた湯」という伝説に由来する。昔、傷を負った鹿が温泉で癒しているのを獵師が見つke、この温泉が発見されたと伝えられている。
37	神畑	かばたけ	上田市・由来には複数あり、主に古墳時代の「神服部」（かんはとりべ）が転訛したという説と、もう一つは日本神話の「建御名方命」（タケミナカタノミコト）に由来する説。鎌倉時代には「加畠」として記録に登場し、その後「上畠」「神畠」と変化し「神畑」となった。
38	神川	かながわ	上田市・由来は複数あり、主なものは山家神社の例大祭の際に参拝人が川の水で身を清めた事から、この水を「神水」（かみみず）と呼び、それが「神川」となったという説と、四阿山頂に祀られている奥社が白賀白山神社である事から「加賀川」と呼ばれ、それが転じて「神川」になったという説もある。
39	真田町長	さなだまちおさ	上田市・地名の由来は、戦国時代に活躍した真田氏の発祥の地である事に由来する。
40	主税町	ちからまち	飯田市・由来は、元々古代から近世にかけての官庁街や税に関する役職名に由来する。
41	雲母	きらら	飯田市・由来は、川底に雲母がキラキラ輝いていたという説に由来。「雲母」は、鉱物の一種で、薄くはがれやすく、真珠のような光沢がある。
42	相森町	おおもりまち	須坂市・由来については不明。
43	六供	ろっく	小諸市・由来は、室町時代に成就寺の門前に建立された6つの塔頭（地蔵院・華蔵院・明王院・円光院・円蔵院・太子堂）に由来する。
44	上戸	あがと	伊那市・由来ははっきりしませんが、鎌倉時代初期からある地名で、文永年間から弘安年間（1264年～1288年）にはあった。
45	沢渡	さわんど	伊那市・「沢を渡る」という地名は、川や沢が多く、これらを越えて移動する必要があった地形的特徴から付いた地名。
46	美篤	みすず	伊那市・由来は、古くは信濃にかかる枕詞「みすずかる（美篤刈る）」に由来する。この地域は、かつて芹沢村・笠原村、大島村、川手村・青島村・末広村などが合併して美篤村となった。
47	御堂垣外	みどがいど	伊那市・由来は、村内に5つの堂があった事に由来する。
48	高遠町芝平	しびら	伊那市・由来については不明で、現在は廃村や限界集落となっている
49	高遠町荊口	とうのまち ばらぐち	伊那市・高遠町の由来には3つあり、景色の良さ、鷹との関係、念仏の派生がある。荊口の由来は不明。
50	長谷非持	はせひじ	伊那市・由来は、平安時代の「古今著聞集」に登場する「信濃国ひちの郡」に由来すると思われる。この地名は、一条院の時代に天皇の鷹を育てた功績の褒美として屋敷と田園を与えられた「ひちの検校豊

			平」にちなむとされている。
51	上穂	うわぶ	駒ケ根市・由来は、中世に「上穂之郷」として存在し、上穂氏が住んでいた事に由来する。
52	上穂沢	わぶさわ	駒ケ根市・由来は「上穂」と同じで、沢のある場所。
53	神田	じんで	駒ケ根市・由来は、主に「神社の領田」や「神に供える米を作る田」に由来する。
54	百々目木	とどめき	駒ケ根市・由来は、川の急流が音を立てて流れる様子を表す「とどろき」や「どよめき」が転じたもの。
55	桃平	もんだいら	駒ケ根市・由来ははっきりしませんが、長野県は豊かな桃の栽培や、桃の花が咲き誇る景観が由来していると思われる。
56	桜大臣	さくらんど	駒ケ根市・由来は不明ですが、長野県には「桜」にまつわる地名や桜の古木が多く存在する。
57	上原	わっぱら	大町市・由来は、かつて諏訪氏の本拠地であった上原城があった事に由来する。
58	青具	あおく	大町市・由来は、天文21年(1552年)の武田晴信宛行状案に記された「大子(おおこ)」が青具を指すと解釈されている事が初見とされている。「青具」とは、人が土地を区画し、管理するためにつけられた地名。
59	其綿	そのわた	飯山市・由来ははっきりしない。
60	長地	おさち	岡谷市・由来は、かつてあった諏訪郡長地村に由来する。現在は岡谷市に合併された。
61	蓮	はちす	飯山市・由来ははっきりしませんが、仏教に関係するという説もある
62	勝弦	かつつる	塩尻市・由来は、古代末期からこの地にマメ科植物の葛葉が生い茂っていて、蔓状(つるじょう)に絡み合っている様子を表現した葛蔓の音「カツツル」が地名として残ったものと思われる。また、かつて「飼鶴(かいつる)」と呼ばれていたのが転じたものと云う説もある
63	強清水	こわしみず	塩尻市・由来は複数あり、その鮮烈な清水に由来するものと、武田信玄にまつわる伝説に由来するものもある。
64	贅川	にえかわ	塩尻市・由来は、古くは温泉があり「熱川」と書かれていたが、温泉が枯れた後に現在の「贅川」という漢字が当てられた。
65	白膠木	ぬるで	塩尻市・由来は、「白膠木」という植物の名称で、枝を折ると粘液が出る、また白い樹液を塗料として使った事に由来する。
66	洗馬	せば	塩尻市・由来には複数あり、主なものは、木曾義仲の馬を洗ったという伝説や、地形的な特徴から「狭間(せば)」が転じたという説。
67	須砂渡	すさど	安曇野市・平安時代からある地名で「日本紀略」には、寛平9年(897年)に「信濃国に須佐度駅(すさどのうまや)」という記述がありこれは、駅家(うまや)という交通施設があった事を示す。
68	豊科高家	とよしなたくべ	安曇野市・由来は、「豊科」は明治時代に周辺の村々(鳥羽・吉野・新田・成相)の頭文字を繋げて作られた合成地名で、「高家」は明治7年(1873年)に小海渡村・熊倉村・真々部村・中曾根村・飯田村が

			合併して誕生した「高家村」に由来する。
69	三郷明盛	みさとめいせい	安曇野市・由来は、かつて存在した明盛村に由来する。明盛村は明治7年（1873年）に一日市場村・二木村・及木村・中萱村・七日市場村が合併して誕生した。
70	三郷温	みさとゆたか	安曇野市・由来は、昭和29年（1954年）に温村・明盛村・小倉村が合併して「三郷村」が誕生した事に由来する。この「三郷」という名称は、合併した三つの村（温・明盛・小倉）の区域を意味し、「郷」は村に通ずることから名付けられた。
71	青木花見	あおけみ	安曇野市・由来は、中房川と高瀬川の間にある洲の上に発達した村。
72	明科	あかしな	安曇野市・由来は、「あか（赤）」と「しな（階）」が組み合わせたり、赤土の地層が階段状に形成された地形に由来するという説がある。
73	伍和	ごか	下伊那郡・由来は、明治初期に5つの村が合併してできた村。
74	治部坂	じぶざか	下伊那郡・由来は、「治部」という言葉は、律令官制における太政官に属する八省の一つで、「治部坂」という地名は古くからあった。
75	黄野	ぐみの	下伊那郡・由来については不明。
76	漆平野	しっぺの	下伊那郡・由来ははっきりしませんが、「漆」という字があるので、漆の産地かつてこの地で漆の木が多く栽培されており、樹液が採取されていたか、漆器工芸の盛んな地域とも思われる。
77	泰阜	やすおか	下伊那郡・由来は、明治8年に17ヶ村が合併した際に、漢詩の「泰山丘阜」（たいざんきゅうふ）にちなんで名付けられたもので、名前には「豊かで明るい未来と自信を創造する」という意味がある。
78	喬木	たかぎ	下伊那郡・由来は、明治8年（1875年）に当時の阿島村、小川村・伊久間村・富田村・加々須村の5ヶ村合併し発足した。その際に中国の古典「詩経」の「伐木」という詩から「喬木」という名前が選ばれたという。
79	棧温泉	かけはし おんせん	木曾郡・由来は、かつて中山道の難所であった「木曾の棧（かけはし）」が近くにあった事に由来する。この棧は、木曾川沿いの通行の困難な断崖に、丸太や板を差し込んで作られた道、すなわち棧道が地名の由来。
80	南木曾	なぎそ	木曾郡・由来は、木曾地域の南部に位置する事と、南木曾岳に由来する。南木曾岳の「なそぎ」は、険しい崩壊地や浸食地形を表す「なぎ」と接続語の「そ」が転訛したものと思われる。
81	麻績	おみ	東筑摩郡・由来は、麻の栽培が盛んだった事や、麻糸を織る職人が集まった場所で、地名に「麻を積む村」という意味がある。
82	麻	お	東筑摩郡・由来は、麻に関連していた地域で、麻の栽培や加工に区画関連している。
83	青鬼	あおに	北安曇郡・由来は、隣村に現れた鬼が悪事を働いた後、青鬼部落近くの大穴に閉じ込められ、その後改心しこの村に現れて村の発展に尽力した為「お善鬼様」として祀られるようになったという伝説に由来。
84	小谷	おたり	北安曇郡・由来は、麻の産地であったことから「麻垂」（おたり）に由

			来する説がある。
85	大網	おあみ	北安曇郡・由来は、崖沿いの地を意味する「おお（美称）・あば（崖）・め（辺）」が転訛したもの。
86	李平	すももだいら	北安曇郡・由来は不明ですが「李（すもも）」の字がある事で考えると「李」を多く栽培していた地と思われる。
87	奉納	ぶのう	北安曇郡・由来は明確には分かりませんが、神仏に捧げられた、あるいは神聖な場所であった事に由来すると思われる。
88	有明	うみょう	北安曇郡・由来は、かつて存在したという有明湖に由来し、その湖畔にあった有明山に名が残されている。この「有明」という地名は、九州の有明海から名付けられたと言われる。
89	小実平	こじっぺ	北安曇郡・由来については不明。
90	正科	しょうじな	北安曇郡・由来は、古代の氏族名「科野（しなの）」に由来すると思われる。現在は「科野」という表記はほとんど見られず「信濃」と表記されるようになった。
91	上馬場	かみばっぱ	諏訪郡・由来ははっきりしませんが、「馬場」という地名は、馬に関連した場所」に由来すると思われる。
92	乙事	おっこと	諏訪郡・由来は、人家がまばらに点在する地で、鎌倉時代の1202年には「音骨」として登場し、その後「乙骨」を経て「乙事」と変化してきた。
93	御代田	みよた	北佐久郡・由来は、明治維新の「御代（みよ）」を祝い、明治8年に合併した4つの村（小田井・前田原・池田新田・児玉新田）の共通する「田」の字を合わせて「御代田」と名付けられた。
94	馬流	まながし	南佐久郡・由来は、ハケ岳の噴火によって千曲川の支流である大月川が氾濫し、馬まで流された事に由来する。
95	川端下	かわはけ	南佐久郡・由来については不明ですが、地形に関係して付いたと思われる。
96	牟礼	むれ	上水内郡・由来には複数あり、主なものは古代朝鮮語で「山」を意味する言葉に由来する説と、人々が集まる場所を意味する「群れ」から転じたという説がある。

NO	地名	読み方	由 来
1	茜部	あかなべ	岐阜市・由来は複数あり、一つは、野生のアカネが自生し、染料として利用されていたという説と、もう一つは、古文書にある「赤野部」から、夕日で赤く染まった野を意味するという説がある。
2	鏡島	かがしま	岐阜市・由来は、奈良時代にこの地は「乙津島」(おつしま)と呼ばれていた。弘仁4年(813年)、嵯峨天皇の命を受けた弘法大師空海が乙津島に到着した。弘法大師が37日間秘法を尽くし、龍神に法鏡を捧げるとたちまち海が桑畑に変わったと伝えられる。この奇跡的な出来事により、この地は「鏡島」と名付けられた。
3	加納長刀堀	かのう なぎなたぼり	岐阜市・由来は、加納城の西側にあった外堀が薙刀(なぎなた)のような細長い形をしていた事に由来する。この堀は、城の防御と水運の役割を兼ねていた。
4	城田寺	きだいじ	岐阜市・由来は、鎌倉時代には「城田(きだ)郷」とも呼ばれていた。この地域には、戦国時代の重要な戦いに関わった城田寺城が存在し、地名と深い関わりがある。
5	御望	ごも	岐阜市・御望村は、明治22年(1889年)7月1日に町村制が施行された際に、方県郡の村として発足した。その後、明治30年4月1日に厚見郡、各務郡及び方県郡の一部が合併し稲葉郡となり、御望村も稲葉郡の村となった、同日、黒野村、下鶴飼村、今河村、折立村洞村、交人村、古市場村と合併し、鶴飼村が発足した為、御村は廃止された。
6	尻毛	しっけ	岐阜市・由来は、この地域が鳥羽川と伊自良川の合流する低湿地であった事から「湿気(しっけ)」に由来する。
7	次木	なめき	岐阜市・由来は、「並木」が転じて名付けられた可能性がある。この地域は、川の恵みにより樹木が豊かに育つ土地であった事に由来する。
8	世保	よやす	岐阜市・由来については不明。
9	旭見ヶ池町	ひみがいけち ょう	岐阜市・由来は、明治30年(1897年)から現在まで続く大字名である岩戸の一部が、昭和19年(1944年)に分離して成立した
10	七軒町	ひちけんちょう	岐阜市・由来ははっきりしませんが、藩政時代の初期、寛永2年(1625年)頃に開かれた町の一部で、当時7軒の商家があったことから「七軒町」と呼ばれるようになったという説と、徳川家康が駿府96ヶ町の町割りを行った慶長14年(1609年)に「七間町」(しちけんちょう)が誕生した。この「七間町」と言う名前は道路幅が七間(役13m~14m)あった事に由来する。
11	葭町	よしちょう	岐阜市・由来は、「葭」の字は、水辺に生える植物である「ヨシ」を指している。かつてこの地域に「ヨシ」が多く見られたり、川が近くにあった事に由来する。
12	梶町	あがたまち	岐阜市・由来については不明。
13	水主町	かこまち	岐阜市・由来は、加納藩の舟手組(船を操る人々の集団)が住んでいた事に由来する。

14	西荘	にしのしょう	岐阜市・由来は、かつてこの地域に存在した荘園「市橋荘」に由来する。市橋荘は、平安時代以降に美濃国に存在した荘園の一つ
15	近島	ごんのしま	岐阜市・由来は、長良川の分派川沿いに位置し、水害時に「陸の孤島」となる微高地であった事に由来する。
16	日置江	ひきえ	岐阜市・由来は、「ヒク（低）エ（江）」に由来し、長良川と木曾川の旧河川に挟まれた低湿地であった事を示している。
17	一日市場	ひといちば	岐阜市・由来は、毎月1日に市場を開いていた事に由来する。
18	交人	ましと	岐阜市・由来は、「三代実録」に記されている石擬姥命（いしこりどめのみこと）の後裔（のちぞえ）である六人部（むしとべ）がこの地に住んだ事に由来し、六人（むしと）が交人（ましと）に転じたもの
19	御手洗	みたらし	岐阜市・御手洗という地名は全国に多く見られるが、それぞれ由来がある。一般的に、神聖な場所や水に関わる場所を示す意味合いを持つ事がある。神社や寺院の近くにある手水舎（ちょうずや）のような場所も考えられる。
20	雄総	おぶさ	岐阜市・雄総地域には、長良川にまつわる幾つかの伝説がある。おくわ様伝説や久官やぶなどがあり、これらは長良川の洪水に関係した伝説や言い伝えです。
21	安食	あじき	岐阜市・由来は、宇多天皇が美濃国に行幸された折り、当地でアシを敷いて休憩された事に由来する。
22	西改田七石	にしかいでん ひちこく	岐阜市・西改田が含まれる岐阜市には、古くから多くの伝承や伝説が語り継がれている。「改田」の地名は「楓（かえで）」の転訛である可能性がある。
23	太郎丸向良	たとうまる むがいら	岐阜市・由来は、「太郎丸」は文明10年（147年）に土岐家の家臣である深尾重列によって築かれた「太郎丸城」に由来する。「向良」の由来は、かつて朝倉軍が砦を築いた場所で、「向かい」という言葉が地形や位置関係を表す可能性がある。
24	歩行町	おかちまち	大垣市・由来は、馬に乗れない身分の侍が居住していた事に由来する
25	郭町	くるわまち	大垣市・由来は、城郭の一部である「郭（くるわ）」に由来する。
26	墨俣町	すのまたまち	大垣市・由来は、長良川の支流が複数合流する地点に位置していた為「洲の股」のような地形をしていた事から名付けられた。古くは「洲俣」「洲股」「須股」とも表記された。
27	外淵	そぶつ	大垣市・由来は、江戸時代初期に外花村（とばなむら）の新田開発により生まれた地域で、かつて水門川の水の流れが緩やかになる「淵」があった場所とされている。
28	南頬町	みなみみづほ ちょう	大垣市・由来は、京都の生活習慣に由来するとされている。
29	祢宜上	ねぎかみ	大垣市・由来は、神職である「祢宜」に由来する。祢宜とは、特に神事を中心となる人物を指します。
30	苧生茂	おうま	高山市・由来は、麻が生い茂る（うもる）土地であった事に由来する
31	黍生谷	きびゅうだに	高山市・由来は、標高1300mの高地で、他の作物が育ちにくい中

			で、黍（きび）だけが生育した事に由来する。
32	木賊洞	とくさぼら	高山市・由来は、物を磨いたり歯を磨いたりするのに使われた植物の「トクサ」に由来する。また、「洞」は、尾根と尾根に挟まれた細長い平地や、水の流れていない谷間を意味する地名に使われる。
33	本母町	ほのぶまち	高山市・由来ははっきりしませんが、飛騨国府があった場所ではないかという説がある。
34	荘川町六厩	しょうかわち ようむまや	高山市・由来には複数あり、かつてこの地に6棟の馬小屋があった事に由来する説と、金山師であった岡田家の先祖が、大野平に家を建てた事から「六馬屋」という地名が「六厩」になったという説。
35	朝日町甲	あさひちよう かぶと	高山市・由来は、甲城（かぶとじょう）の形が兜（かぶと）に似ていた説と、東氏が氏神に兜を奉納した故事に由来する説がある。
36	清見町大原	きよにちよう おっぱら	高山市・「大原」の由来は、地形や事前環境に由来し、「大きなはらっぱ」や「広い野原」などが考えられる。
37	清見町夏厩	きよみちよう なるまや	高山市・由来は複数ありますが、主なものは古くから馬を野で飼育し、冬の飼料として稗糠（ひえぬか）や稗殻（ひえから）を蓄え、その厩の肥えを翌年の田畑に施したところ、作物が豊作になったため、村全体で夏の間も冬の飼料を蓄えるようになり「夏厩村」と呼ばれるようになった。
38	久々野町 無数河	くぐのちよう むすご	高山市・由来は、古語の「むす」に由来し、「苔むす」という意味合いから、清流に苔が多く生えていた地域を指すと思われる。
39	久々野町 長淀	くぐのまちな かとり	高山市・由来は、川の流れによって出来た青く淀んだ淵に由来する。
40	国府町 漆垣内	こくふちよう うるしがいとう	高山市・由来ははっきりしませんが、地域内に漆の木が栽培されていたり、漆器の生産が行われている区域や集落と思われる。
41	丹生川町 板殿	にゅうかわちよう いたんど	高山市・由来は、「イタンド」で井戸氏を呼称した「井戸殿」から付いたという説がある。
42	丹生川町 根方	にゅうかわちよう ごんぼう	高山市・「丹生川」の由来については、「斐太人の真木流すちよう丹入の川事は通えぞ舟ぞ通わぬ」と言う万葉集の柿本人麻呂の選歌に由来する。「根方」の由来については、この近くにある「岩陰遺跡」の縄文人を「根方人」と呼び、根方と名付けられたのは、笠根城がありその方（ふもと）という意味から付いた。
43	一之宮町 渡瀬	いちのみやま ち わたせ	高山市・一之宮の由来は、古くからその地域で最も格式の高い神社や信仰を集める神社を指し、「渡瀬」の由来は「瀬」が流れが浅く流れているところを表すことに由来する。
44	廿原町	つづはらちよう	多治見市・由来は、北へ続く原野を開発した事に由来する。
45	小名田町 別山	おなだちよう はなれやま	多治見市・由来については不明。
46	十六所	じゅうろくせん	関市・由来については不明。
47	駒場	こまんば	中津川市・由来は、十勝種畜牧場にちなんで付けられている地名。昔は柏林にスズランの花が咲き、とりわけ初秋の草原に可憐な姿で咲き

			乱れるキキョウが沢にあった所から「キキョウが丘」とも呼ばれた。
48	馬籠	まごめ	中津川市・由来には複数あり、「馬を宿に置いて行った」という説や、「馬の背のような小高い場所にある」という説もある。また、「狭い坂道を越える」という意味の「まごめ」に由来するという説もある。
49	神坂	みさか	中津川市・由来は、古くから有名な「神坂峠」に由来する。この峠はかつて東山道の最大の難所であり「神の御坂」と呼ばれていた。
50	安楽満	あらま	中津川市・「安落満」（あらたま）という地名は、古代の日本に由来する深い歴史と文化が込められている。「あらたま」は、上代の日本語で「新しい」や「新鮮な」と言った意味を持つ言葉です。
51	加子母	かしも	中津川市・由来には複数あり、山の地形に由来する説では、傾いている尾根や山の斜面を意味する「かしお」が転じたという説と、山林労働者に由来する説では、「加子」は山林労働者や「木を切る人」を意味する「木こり」に由来する説や、「母」の字にこめられた意味の説では「母」の字は単なる当て字ではなく、木材を育む「母なる森」へ敬意や、林業に携わる人々を慈しむ思いが込められているという説。
52	上大起	かみおごぜ	中津川市・由来については不明。
53	鳥屋脇	とやき	中津川市・由来ははっきりしませんが、鳥が多く集まる場所や、鳥に関係する施設が近隣にあったとも考えられる。
54	安毛	あたげ	美濃市・由来は複数あり、一つは豊作を祈願する意味合いや、長良川と板取川の合流点にある急な崖地に由来する説がある。
55	蕨生	わらび	美濃市・由来は、かつてその一帯にワラビが自生していた事に由来。
56	大湫	おおくて	端浪市・由来は、「湫」（くて）が沼地や湿地帯を意味する事に由来し、この地域は峠に挟まれ、水の溜まりやすい地形であった事に由来
57	上手向	かみとうげ	恵那市・由来は、かつて山越えをする人々が道中の安全を神に祈り、供え物をする「手向け」をした事に由来する。
58	閑羅瀬	しずらせ	恵那市・「閑羅瀬」の由来は、断崖絶壁の川の瀬に由来する。
59	毛呂窪	けろくぼ	恵那市・由来は、古くは「毛鹿母」とも書かれていた。語源は、和田川の岸へ牡鹿が降って、小鹿を育てているのが見えた。里の人は不審に思い近かざくと、そこからこんこんと霊泉が湧いているのを発見しこれにちなんで「毛鹿母」と名付けた。
60	帷子	かたびら	可児市・由来は複数あり、主に「着物の帷子」と「地形の片平」の二つの説がある。着物の「帷子」説は、昔、この地域の人々が麻を紡いで、裏地のない着物である「帷子（かたびら）」の元となる麻布を作り、朝廷などの身分の高い人々に納めていた。これにより、朝廷から「かたびら」という地名が与えられたという説。地形の「片平」説では、片側が山で、もう片側が田野の広がる平地である「かたひら」という呼び名が、徐々に変化して「かたびら」になったという説。
61	塩河	しゅうが	可児市・由来は、「シオジリ（萎（い）れたような狭い谷の後方、奥の方）」という地形に由来する。
62	谷迫間	やばさま	可児市・由来ははっきりしませんが、かつて「矢迫間」とも表記され

			ていた。この地域は可児川の支流である谷迫川沿いに広がっている地域です。
	大桑	おおが	山県市・由来は、戦国時代に斎藤道三が城下町を建設する際に、山県郡大桑（現在の山県市高富町）から町人を呼び寄せ、移住させた事に由来する。
64	牛牧	うしき	瑞穂市・由来には複数あり、主に牛を飼育する牧場があった事に由来する説と、「潮巻」が転じた説では、かつてこの地域に深い淵があり、精進川が渦巻きをよく起こしていた為「潮巻」が転じて「牛牧」となったという説がある。
65	神岡町東雲	かみおかちょう しのめ	飛騨市・由来は、元々は「篠の目」という言葉で、昔の家屋では篠竹を編んで窓としていた。この篠竹の隙間から太陽が昇る前の、空が茜色に染まる夜明け前の時間を指す日本の古語。
66	祢宜ヶ沢上	ねがそれ	飛騨市・由来は、祢宜（ねぎ）という神職に由来すると思われる。
67	古川町信包	ふるかわちょう のぶか	飛騨市・由来は、織田信長の弟の織田信包（おだののぶか）に由来する可能性が高い。
68	神海	こうみ	本巣市・由来は、「神見」とも書かれたことに由来する。尾根川の谷間にある集落で、かつては斎藤道三に追われた土岐頼芸が神海を經由して越前に逃れたという記録も残っています。
69	木知原	こちぼら	本巣市・由来は不明ですが、木知原は尾根川沿いの豊かな里山に位置し、古くから人々が生活を営んできた歴史のある地域。日本列島のほぼ中央に位置する地域です。
70	七五三	しめ	本巣市・由来は、大区小区制においてこの地域が第七大区の第五小区であり、その三つの村が合併した事に由来する。
71	根尾越卒	ねおおっそ	本巣市・「越卒」の由来は、かつて本巣郡に「存在した「越卒村（おっそむら）」に由来する。明治22年（1889年）7月1日に町村制により発足し、明治30年（1897年）4月1日に市場村などと合併し、中根尾村が発足した為、同日をもって廃止された。
72	根尾越波	ねおおっぱ	本巣市・越波の由来は、鎌倉時代の1287年の地震による土石流が集落を避けるように低い山嶺を越えていった事に由来する。
73	根尾水鳥	ねおみどり	本巣市・水鳥の地名の由来は不明です。
74	石徹白	いとしろ	郡上市・由来は、白山中居神社の創機祀伝承に深く関わっている。社伝によると、景行天皇の時代にイザナギ・イザナミの二神が船岡山に天降り、その際に千引岩（石）、許等度（ことど）の呪文、白雲から一字づつとって「石度白」と名付けられたという。
75	高鷲町	たかすちょう	郡上市・由来は、明治30年（1897年）に鮎立、大鷲、鷲見、西洞の4つの村が合併した際に、鎌倉時代からゆかりのある鷲見郷の「鷲」と、郡上郡で最も標高の高い場所にある事から「高」を組み合わせ「高鷲」と名付けたという。
76	白鳥町為真	ためざに	郡上市・白鳥の地名は、日本武尊が亡くなった後、その亡骸が白鳥となって飛び立ったという伝説に由来する。為真の由来は、かつて岐阜

			県郡上郡に存在した「為真村」に由来するが、明治30年に廃止されている。
77	明宝寒水	めいほう かのみず	郡上市・由来は、烏帽子岳から流れる水を「神の水」と崇め「かのみず」が転訛して「かのみず」となり。明治時代半ば過ぎに「寒水」と表記されるようになった事に由来する。
78	大和町場皿	やまとちょう ばっさら	郡上市・大和町という地名は、町（当時は村）が大きく和して発展することを願って付けられたとされる。「場皿」の由来は不明。
79	和良町 安郷野	わらちょう あごの	郡上市・和良町は、平安時代には既に「和良郷」として書物に記されている。和良川を中心に発展してきた地域であることから、地名の由来になったと思われる。
80	法師丸	ほうしまる	郡上市・由来は、戦国時代の武将であり毛利氏の外交僧でもあった安国寺恵瓊（あんこくじえけい）の幼名「法師丸」に由来する。
81	上野河戸	うえのこうず	海津市・「河戸（こうず）」由来は、「この地域で豊富に採れた「河戸石」が語源という。
82	仏師川	ぶっしがわ	海津市・由来は、河岸などの小さな平地を意味する言葉に由来する。
83	赤沼田	あかんだ	下呂市・由来は、庄内地方特有の鉄分を含んだ赤い粘土質の土壌により、沼が赤く見えた事に由来する。
84	小坂町坂下	こさかちょう さこれ	下呂市・「坂下（さこれ）」の由来は、古語の「うれ（末）」と「坂（さか）」が合わさった「さかうれ」が母音交替と短音化を経て「サコレ」になったという説がある。また、この地域が飛騨川の峡谷であり、「サコ（狭い処）」と「ラ（場所を示す接続語）」が転じて「サコレ」になったという説もある。
85	馬瀬川上	まぜかおれ	下呂市・由来は、川上川の上流に位置し、川岸段丘上に集落が発達したことから「川の上（うえ）の方」という意味で「かわうえ村」と呼ばれるようになったという。
86	古井町	こびちょう	美濃加茂市・由来は複数あり、アイヌ語の「ペテウコヒ」（川につながった場所）に由来する説や、「狭い土地」を意味するという説もある。
87	三和町廿屋	さんわちょう つづや	美濃加茂市・由来ははっきりしませんが、「廿屋」はかつて加茂郡に存在した「廿屋村」に由来する地名。明治30年（1897年）に統合により廃止された。
88	下石町	おろしちょう	土岐市・由来は、「嵐（おろし）」という言葉に由来し、山から吹き下ろす風下にある低い土地を指す。その後、戦国時代に「下石」という表記になり、妻木川が運ぶ石が堆積する土地の特性から「石」の字が加えられたという。
89	苧ヶ瀬	おがせ	各務原市・由来は、文永9年（1272年）頃、人間や家畜を襲い里人を苦しめていた白髪の竜女がいた。この竜女は尾張の福富新蔵の鎬矢で傷を負い、心を入れ替えるために山に登りました。その際、竜女が白髪を切り、その白髪が「苧（麻を巻き付ける道具のかせ）」に似ていた為、この地が「苧ヶ瀬」と呼ばれるようになったという「苧（お）」に似ていたことに由来する伝説がある。

90	各務	かかみ	各務原市・由来は、古代の「美濃国各務郡」に由来し、山に囲まれた地形から「囲む」様子が反映された説や、鏡作部（かがみつくるべ）が居住していた事に由来するという伝説がある。
91	表佐	おさ	不破郡・由来は諸説あり、日佐説では奈良時代に百済から人が移り住んでいた通訳をしていた人達を「日佐」と言った事から、これらの地域を日佐と言い、室町時代に「表佐」に変わった説。
92	神戸	ごおど	安八郡・由来は、日吉神社の門前町として発展した事に由来する。
93	下大樽	しもおおぐれ	安八郡・由来については不明。
94	海松新田	みるしんでん	安八郡・由来は「海松」は古語で海草を意味していて、この地域はかつて伊勢湾の入り江だった。
95	塩喰	しおばみ	安八郡・由来ははっきりしませんが、周辺地域の地名が川や水害と関連している事から、「塩喰」も水に関係する由来を持つ可能性がある
96	小牛	こうじ	揖斐郡（いびぐん）・由来については不明。
97	脛永	はぎなが	揖斐郡・由来ははっきりしませんが「脛」（はぎ）という漢字は、日本武尊（ヤマトタケル）の物語に登場する「七掬脛（ななつかばき）」という料理系の名前にも使われているが、地名との関係は不明。
98	門入	かどにゅう	揖斐郡・由来は、かつて「門丹生（かどにゅう）」とも表記され、この「丹生（にゅう）」は、水銀朱（辰砂）を採掘・精錬する技術集団を指す言葉であり、門入は古代から水銀の産地であった事を示している また「門」は境界の出入り口を意味し、交易の要衝であった事も地名の由来に関係している。
99	小谷	こたて	揖斐郡・由来は、主に「小さな谷」という地形に由来するが、この地域には小さな城砦があった。
100	谷汲有鳥	たにくみあつとり	揖斐郡・谷汲の由来ははっきりしませんが、古代大和朝廷とのつながりもあり、古くから反映された地区。有鳥の由来は、渡鳥が多く飛来する地域に由来すると思われる。
101	谷汲岐札	たにくみみきれ	揖斐郡・由来については不明。
102	春日美束	かすがみつか	揖斐郡・由来は、かつて存在した春日村と美束村があり、合併により現在の地名となった。「春日」の由来は、古代から信仰を集めていた春日神社に由来し、「美束」の由来は地形から「美しい地形」や複数の集落が集まって一つの集落になった事を意味すると思われる。
103	上秋	かんだけ	揖斐郡・由来については不明。
104	大い斐	おおえび	揖斐郡・由来は、平安時代からの地名で、美濃国大野郡衣斐村が起源という。明治30年（1897年）に公郷村・小衣斐村・領家村と合併し、鶯村（うぐいす）が発足した事で廃止された。
105	曲路	すじかい	本巣郡・由来は、その土地の形状が曲がりくねった道や水路に由来する可能性が高い。
106	顔戸	ごうど	可児郡・由来は、川沿いの地であることから、川処（かわど）が転じたという説があるが、はっきりしない。
107	謡坂	うとうざか	可児郡・由来は、中山道の急な坂道を旅人が苦しさを紛らわすために

			歌を歌いながら登った事に由来する。
108	次月	しづき	可児郡・由来については不明。
109	坂祝	さかほぎ	加茂郡・由来は、平安時代に編纂された「延喜式神名帳」に記載されている「坂祝（さかはふり）神社」に由来する。
110	越原	おっばら	加茂郡・由来ははっきりしませんが、地域の地形や自然環境に由来する可能性が考えられる。
111	御母衣	みぼろ	大野郡・由来は複数あり、「泥濘説（ぬかるみ）と衣説がある。泥濘説では、「和訓栞（わくんかん）」によると「未曾漏（みぞろ）」は泥濘を意味し「美土路（みどろ）」が転じたものとされる。「御母衣池」という濁った池から生じた泥濘に由来するという説がある。

静岡県



NO	地名	読み方	由来
1	産女	うぶめ	静岡市・由来は、江戸時代に難産で亡くなった女性の霊を鎮めるために祀られた「産女明神」に由来する。この女性は武士の妻で、臨月中に亡くなり、夜な夜な村をさまよい助産を訴えたと伝えられる。
2	大鋸町	おおがまち	静岡市・由来は、一般的に木材を挽くための大きな鋸（のこぎり）やそれを使う職人、またはその作業場に由来する。
3	佳山	かやま	静岡市・由来については不明。
4	杳谷	くつはや	静岡市・由来ははっきりしませんが、「杳」は履物の事で、中世では「杳屋郷」と呼ばれていた。
5	慈悲尾	しいのお	静岡市・由来は複数あり、主なものは飛鳥時代から続く歴史のある寺院「増善寺」の「慈悲」という言葉と、その寺の麓を指す「尾」に由来する説と、テンダイウヤクという木も地名に関わっている説もある
6	千代	せんだい	静岡市・由来は、「千代」には「永遠に続く」という意味があり、縁起の良い地名です。
7	建穂	たきょう	静岡市・由来は複数あり、主なものは日本武尊（やまとたけるのみこと）の供の建部（たけべ）という人物が庵（いおり）を構えた事から「タケイホ」と略されたことに由来する説と、アイヌ語の「トキウ」（沼茸處）（ぬまぶきどころ）に由来する説がある。
8	富沢	とんざわ	静岡市・「富沢」という地名は日本各地に存在するが、それぞれの由来がある。静岡県の富沢の由来は、はっきりしない。
9	馬場町	ばばんちょう	静岡市・由来は、徳川家康が駿府城を築いたころ、浅間神社の前に馬場があった事に由来する。この地域は、かつて馬が行き交う場所であった事を示している。
10	蕨野	わらびの	静岡市・由来ははっきりしませんが、植物の「ワラビ」から来ているのではないかと考えられます。
11	安居	あご	静岡市・由来は、安居には曹洞宗安居山石蔵院があり、徳川家康が幼少期に立ち寄ったり、亡くなった際に霊柩が一時安置されたと伝えられる。この事から、家康ゆかりの地として「安居」という地名が付いたと思われる。
12	丸子	まるご	静岡市・由来は、川岸に近い場所に多く見られる「丸子」という部族が作った集落に由来する。
	聖一色	ひじりいっしき	静岡市・由来は複数あり、「駿河国新風土記」では、聖は樋（ひ）（堤のこと）の後（しる）の意で、「一色」は「日本書紀」崇神天皇に見える印色入彦命の部曲の民が居住した（いにしき）という地名が「いっしき」に転じたとする山梨稲川の説を引用し「駿河志料」は、室町期の守護大名「一色氏」の支配地によるとしている。
14	用宗	もちむね	静岡市・由来は、持舟城の「持舟」（もちふね）の名から転訛して「用宗」（もちむね）と呼ばれるようになったという。
15	蒲原堰沢	かんばらせきざわ	静岡市・蒲浦の由来は、蒲が一面に繁茂していた為に付いた地名。堰沢の由来については堰沢川に由来すると思われる。

16	葛沢	とずらざわ	静岡市・由来については不明。
17	馬走	まばせ	静岡市・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の際、草薙の原で野火の難に遭った後、軍馬を休ませるために放したところ、馬が東の谷へ走り込み、清い水が湧く住みやすい谷間を発見したという伝説が「馬走」の地名の語源となった。
18	山原	やんばら	静岡市・由来については不明。
19	利町	とぎまち	浜松市・由来は、刀などの研師（とぎし）が多く住んでいた事に由来し、時代と共に変化した。
20	平田町	なめだちょう	浜松市・由来は、「ナメリ田」が転訛して「平田（なめだ）」になった説などがある。江戸時代の浜松宿下において、城を維持するための職人や商人が住む町として発展した。
21	茄子町	なすびちょう	浜松市・由来は、昔ナスが良く採れた事に由来し、かつては「茄子一色村」と呼ばれていた。
22	曳馬	ひくま	浜松市・由来は、かつて遠江地方が「引間」または「引馬」と呼ばれていた事に由来する。この「引間」は万葉集にも見られる古い地名で徳川家康が居城を移すまでは「引間城」として存在する。
23	将監町	しょうげんちょう	浜松市・由来は、かつてこの地域が「将監名村（しょうげんみょうむら）」と呼ばれていた事に由来する。「将監」という名は、近衛府の三等官である「将監」という官職、又はそれにちなんだ武家官位。
24	大柳町	おおやぎちょう	浜松市・由来ははっきりしませんが、「柳町」という地名は日本各地の存在し、柳の木に由来や宿場町、遊女町などの背景を持つ地名。
25	参野町	さんじのちょう	浜松市・「風土記伝」によれば「三神野斎海神三座」とあり、勧請当時の津毛利神社（昔はこの地方46ヶ村の大氏神であった関係から「四六所大明神社」と称されていた）の祭神が「底筒男之命」「中筒男之命」「上筒男之命」の海神参座であった所から「参神野」と呼ばれた。のちに、不敬に当たるとして「神」の一字を除き「参野」と下。
26	鼠野町	ねずみのちょう	浜松市・由来には諸説あり、一つは1573年に古山八郎右衛門が村を興した際、仲間たちが大きな木の根元に住んでいた事から「根住（ねずみ）」と呼ばれ、それが「鼠」に転じたという説と、もう一つは荒れ地の開発中に白鼠が現れ、それが縁起が良いとして「鼠野」と名付けたという説。
27	神立町	こうだちちょう	浜松市・由来は、「神館（かんだち）」が訛って「神立」になったという。「神館」とは神事儀式を行うための館（ヤカタ）のこと。
28	小沢渡町	こざわたりちょう	浜松市・由来は、昔、町の北側にあった池や小さな沢を渡って東海道へ出て行った事に由来する。
29	篠ヶ瀬町	ささがせちょう	浜松市・由来は、中世には「笹ヶ瀬」とも記され「竹瀬」という地名が関係していると考えられる。
30	蛸塚	しじみずか	浜松市・由来は、縄文時代後期の貝塚から発見された「シジミ」に由来する。
31	早出町	そうでちょう	浜松市・由来は、田植えの時期である五月や田の神に奉仕する早乙

			女、豊作を願う早苗など、他の神に早く近づきたいという人々の気持ちが込められた「サデ」という言葉が転じて「早出（そうで）」になったという。
32	増楽町	ぞうらちょう	浜松市・由来は、室町時代の永享4年（1432年）に、六代将軍足利義教が感嘆した老松に由来する。この松は堯孝僧正によって和歌に詠まれ、人々から「叟羅之松（ぞうらのまつ）」と呼ばれていた。この「叟羅」が転じて、現在の「増楽」という地名になったという。
33	新橋町	にっばしちょう	浜松市・由来は、この地の沼地の最もくびれた所に新しい橋が架けられた時に、里人が名付けた「新橋」が地名の由来という。鎌倉時代の資料には「新橋郷」の記入がある事から、かなり古い時代からの地名として使われている。
34	芳川町	ほうがわちょう	浜松市・由来は、1954年に芳川村が浜松市に編入される際に、旧村名である「芳川」を残したいという住民の意向により、当時の芳川村の中心地であった大橋と神出の二つの字を合わせて命名された。
35	引佐町	いなさちょう	浜松市・由来は、古代から存在する郡名「引佐郡」に由来し、「イナ（砂地）」と「サ（接続語）」が組み合わさった「引き続いて伸びていく砂地」を意味する地形から付いたと思われる。
36	鶴代	ぬえしろ	浜松市・由来は、「鶴（ヌエ）」という妖怪に由来する。 約800年前、二条天皇賀患った奇病は、頭が猿、体が狸、手足が虎尾が蛇の姿をした妖怪「鶴」の仕業とされた。弓の名手であった源頼政と遠江の住人である猪鼻早太が鶴退治を命じられた。激しい戦の末猪鼻早太によって討ち取られた鶴は四つに切断され、その一部が猪鼻湖周辺に落ちたという伝説。
37	鹿玉	あらたま	浜松市・由来は、古代から中世に架けて遠江国の中央部寄りに存在した「鹿玉郡（あらたまぐん）」に由来する。この郡名は「和名抄」に「阿良多末」と訓が記されており「今有玉と称す」とある事から「有玉」が「鹿玉」に変遷したと思われる。
38	筏戸大上	いかんどおおかみ	浜松市・由来は、かつてこの地域が周智郡筏戸大上村と呼ばれていた事や田黒村の上流側に筏戸の集落があり、更に上方の山腹の上野の集落を合わせて一村を形成していた。
39	熊	くんま	浜松市・由来には諸説あり、主な説は紀州の人が移住した際に熊野三社を祀った事に由来する説と、野獣（熊など）が多く生息していた為「熊の谷」と呼ばれていた事に由来する説がある。
40	日明	ひあり	浜松市・由来ははっきり知りませんが、天竜川の右岸にあって、かつては豊田郡日明村と呼ばれた。地元では「ひやり」と読まれることも多く、昭和47年に船明ダムが建設された際、部落の住民は全員離村した。ダムの堰堤右側に「日明の里」の記念碑が建立されている。
41	船明	ふなぎら	浜松市・由来は複数あり、主なものは山から切り出した木材の集積地として船が集まり、広く開けた明るい場所という説と、「明」を「ぎら」と読むのは、太陽の光を浴びて「ギラギラ」と輝く様子が、明るい場所を指すという説がある。

42	伊砂	いすか	浜松市・由来ははっきりしませんが、地形説では、山に挟まれた狭い場所や谷筋を指す「狭(さ)」と稲に関連する「稲(イナ)」が組み合わさり「稲砂」となったという説と、地理的関連説では、信州伊那の左にある事から「伊奈佐」と名付けられたという説がある。
43	水窪町	みさくぼちょう	浜松市・由来は、この地域がまわりよりも窪んだ土地であった事に由来する。
44	米沢	みなざわ	浜松市・由来は複数あり、「ヨネ(米)」のなるサワ(草の生える湿地)や「白い水が沸く米井(よねい)がある」などの説がある。
45	向皆外	むかがいど	浜松市・由来については不明。
46	白神	しらなみ	浜松市・由来については不明。
47	木葉島	きのこじま	浜松市・由来については不明ですが、地形的な所から付いたと思われる。
48	大嵐	おおぞれ	浜松市・由来は、日本語の「ゾルレ」が語源とされている。これは、山肌が崩れた場所や険しい地形を示す「ザザー」「ソゾー」と言った音に由来する。特に、天竜川の峡谷にある険しい急斜面のザレ場(崩れやすい場所)を指す「オオ・ザレ」が転じて「大嵐」になった。
49	生島	おくしま	浜松市・由来については不明。
50	下里	くだり	浜松市・由来については不明。
51	大里	だいら	浜松市・由来は、「大いなる里」を意味し、豊かな水田地帯への人々の願いを込められていると思われる。
52	中部	なかっぺ	浜松市・由来については不明。
53	切開	きいなま	浜松市・由来については不明。
54	両久頭	もろくず	浜松市・由来についてははっきりしませんが、この地域は浜松市水窪町地頭方に位置し、かつては水窪ダム建設により水没集落です。
55	難波道	なんばんど	浜松市・由来は、古代の官道である「難波大道」に由来し、時代と共にその呼称や関連する地名が変化している。「難波大道」は、仁徳天皇の時代には「大道(おほち)」と呼ばれ、都の中に作られた道として日本書紀に記されている。
56	巻頭	まきほつ	浜松市・由来については不明。
57	西浦木負	にしうらきしょう	沼津市・由来は、山から木を伐り出し、背負って下ろした事に由来するという説がある。
58	戸田	へだ	沼津市・由来は、平安時代には「部田(へだ)」と呼ばれており、それ以前は「ヘタ」と呼ばれていたという。また、アイヌ語が語源という説もある。
59	鷗町	くまたかちょう	沼津市・由来は、熊鷹(くまたか)の尾羽が矢羽として重要だったことから、矢羽作りに携わる人が住んでいた事に由来する。
60	白金町	しろがねちょう	沼津市・由来は、応永年間にこの地を開いた「柳下上総介氏」が、大量の銀(しろかね)を所有していた事から「銀長者⇒白金長者」と呼ばれ、白金がそのまま地名になったという。
61	蓼原町	たてはらちょう	沼津市・由来は、この地に「タデ」という植物が多く自生していた。

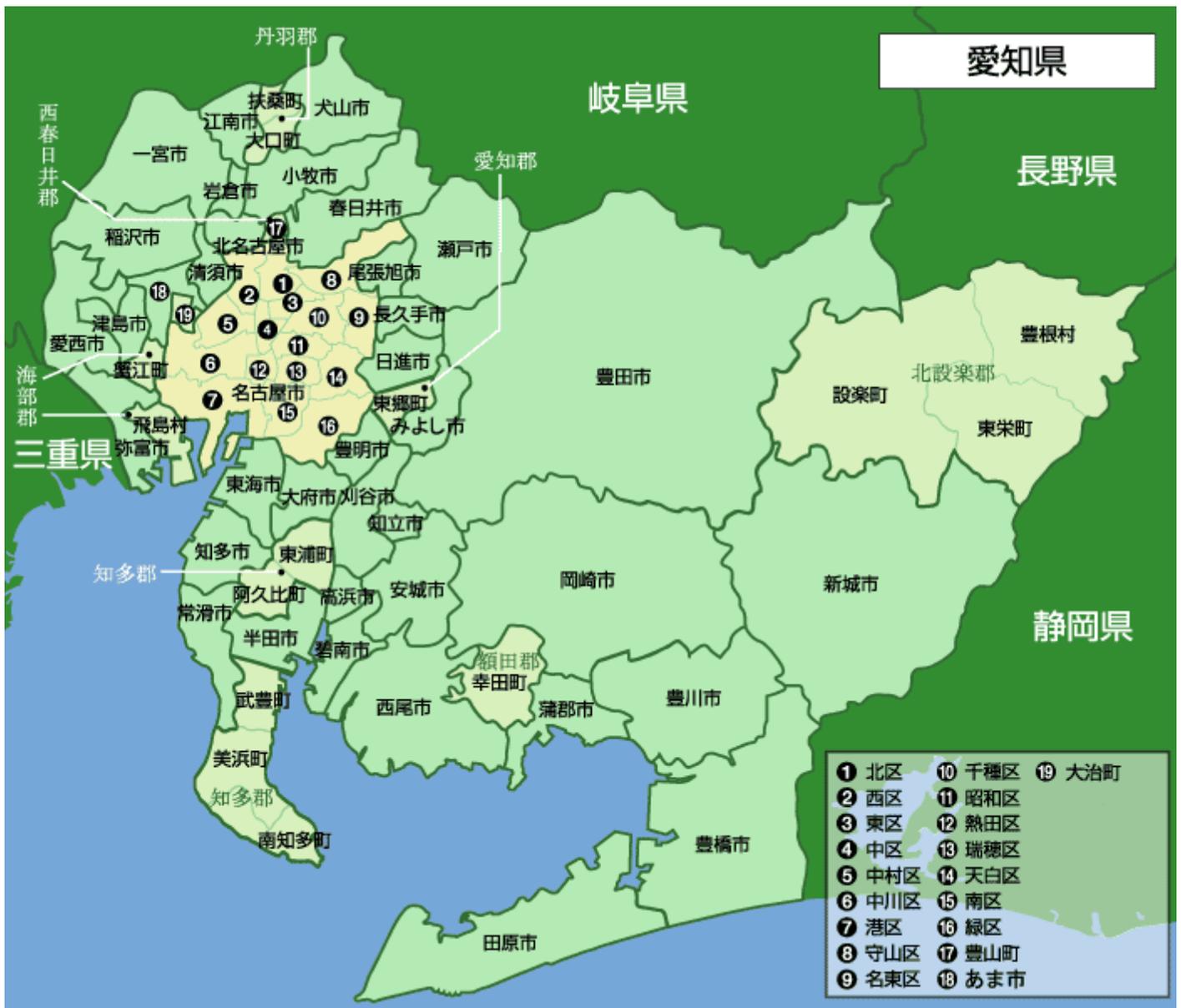
62	鳥谷	とや	沼津市・由来については不明。
63	熱海	あたみ	熱海市・由来は、かつて海中から暑い温泉が噴出し、海水が沸騰していた事に由来する。この「熱い海」を意味する「あつうみが崎」が変化して「あたみ」という説がある。
64	網代	あじろ	熱海市・由来は、漁網を入れる場所、つまり漁場を意味する「網代」に由来する。この地域は古くから漁業が盛んで、漁師たちが網を入れる場所であった事から、その名が名前が付いた。
65	猪土居	かなやししどい	島田市・由来は、猪や鹿が出没し、農作物を荒らした記録があり、農作物を守るために畑の周囲に高い土居を築いて猪の害を防ぎ、これが地名にとして残ったという。
66	旗指	はっさし	島田市・由来は、天正年間（1573年～1592年）に徳川家康が武田氏と対峙した際、この付近に旗を立てたという伝承に由来。
67	湯日	ゆい	島田市・由来ははっきりしませんが、明治6年（1876年）に上湯日村と下湯日村が合併し湯日村となった。
68	安居山	あごやま	富士宮市・由来には複数あり、主なものは、僧侶が山に籠って修行する「安居（あんご）」に由来する説と、川で漁が盛んな場所であった事から「網子（あご）」に由来する説がある。
69	大晦日	おおずもり	富士宮市・由来は、源平合戦や後醍醐天皇の勅使に関する歴史が深く関わっている。後醍醐天皇が鎌倉幕府討伐の戦勝報告の為、富士宮の浅間大社へ遣わした勅使の久我長通がこの地で病死した。久我長通は菅原道真を信仰しており、その側に埋葬してほしいと希望した為、芭蕉天神宮が造られた。その後、村人は久我家から多くの仕事を請負い、年末まで忙しく働いていた事から「大晦日（おおづもり）」と呼ばれるようになったという説がある。
70	富戸	ふと	伊東市・由来については不明。
71	十足	とおたり	伊東市・由来は、伊豆諸島の誕生神話に登場する「十島（としま）」に由来すると思われる。この神話では、三島大明神が龍神と雷神を雇い大規模な島焼きによって七日七夜の間十の島を作り出したという。
72	猪戸	ししど	伊東市・由来については不明。
73	赫夜姫	かぐやひめ	富士市・由来は、古くから「竹取物語」に影響を受けた「姫名郷（ひめなごう）」と呼ばれ、かぐや姫伝説の発祥地で、この地域では、かぐや姫は月に帰ったのではなく、富士山に帰ったという独自の伝説が語り継がれています。
74	須津	すど	富士市・由来は、船を待つ場所、つまり船着場に由来する。「須」は待つ、「津」は港や船着き場を意味する。
75	五十子	いかご	磐田市・由来は、子どもの出産後50日目を祝う行事に由来する。かつては「伊加子」や「以加古」とも表記された。
76	匂坂	さぎさか	磐田市・由来は、かつて存在した「匂坂郷」に由来する。匂坂郷は、戦国時代にこの地を領した国人領主「匂坂氏」の地です。匂坂氏は大永8年（1528年）に今川氏輝から匂坂上村などを安堵された。

77	福田	ふくて	磐田市・由来は、太田川（旧諸井川）の水が直接海に入らず、南西に曲がり流れ着いてついに吹き切れて海に入った場所を意味する「吹切出（ふききりいで）」が転訛したもの。
78	虫生	むしゅう	磐田市・由来は、古代に「蒸湯（ムシユ）」と呼ばれていた事に由来。「虫生」という地名は全国に多く存在し、読みも「むじょう」「むしゅう」「むしう」など様々です。由来の可能性も複数あり、「苧麻（からむし）や「養蚕」などとの関係がある。
79	焼津	やいづ	焼津市・由来は、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の伝説に由来する。東征の際に途中で賊に襲われた際、日本武尊が草を薙ぎ払い火を放って賊を滅ぼした事から、この地を「焼きつ」が「益津」となり、それが転じて「焼津」となった。
80	小川	ちいがわ	焼津市・由来は、人目につきやすい事から「小さな川」を意味する「小川」から名付けられたと思われる。
81	小土	こひじ	焼津市・由来は不明ですが、古代から存在する地名。
82	飯淵	はぶち	焼津市・由来ははっきりしませんが、「飯淵」という地名は古く、中世には吉永郷の一部であった。
83	五ヶ堀之内	ごかほりのうち	焼津市・由来は、戦国時代に小川城城主の長谷川氏が城を築く際に、大量の土が必要となり、田畑から土が採られました。土を採取した跡に出来た五つの大きな堀に由来する。
84	三ヶ名	さんがみょう	焼津市・由来は複数あり、現在の浜松市の「三ヶ日」に海岸を意味する「浜」が組み合わさったもので、三ヶ日堂というお寺に由来する伝説や、三日池という伝説の由来がある。
85	道原	どうばら	焼津市・由来については不明。
86	祢宜島	ねぎしま	焼津市・由来は、「祢宜」という言葉が神職を指す事から、神社に関連する島と思われる。
87	八桶	やぐす	焼津市・由来は複数あり、一つは、賀茂神社の社地に生えていた8本の大桶が公材として伐採された事に由来する説と、もう一つは、元明天皇の時代に八桶氏がこの地に移り住み、田村将軍から郷主役を命じられた事に由来する。
88	与惣次	よそうじ	焼津市・由来は、新田開発に伴う地名。江戸時代初期に石津村の新田開発で出来た村。
89	策牛	むちうし	焼津市・由来は、かつて川の氾濫を防ぐために設置された護岸設備「聖牛（せいぎゅう）」に由来すると思われる。地元では近年まで「ぶちうし」とも呼ばれていた。
90	孕石	はらみいし	掛川市・由来は、川岸にあった巨大な「孕石（はらみいし）」に由来する。孕石とは、石の中に別の石が入っている「子持ち石」を指す言葉
91	葛ヶ丘	かつらがおか	掛川市・由来については不明。
92	上土方旦付新田	かみひじかただん つく しんでん	掛川市・由来は、今滝村から分離した「旦付新田」に由来する。
93	国包	くにかね	掛川市・由来は、かつてその地に住んでいた鍛冶職人の名前に由来。

94	逆川	さかがわ	掛川市・由来は、川の流れが周辺の他の河川とは逆方向に流れることや、激しく蛇行し、度々水害をもたらした「暴れ川」であった事に由来する。
95	肴町	さかなまち	掛川市・由来は、かつて魚を商う店が多く集まっていた事に由来する徳川家康が浜松城を築いた頃、城の台所を担う魚商人が集められ、魚河岸が設置されたのが始まりという。
96	佐夜鹿	さよしか	掛川市・由来は、明治時代初期に佐野新田、小夜中山村、大鹿村が合併した際、それぞれの村名から一文字ずつ取って「佐」「夜」「鹿」を組み合わせた事に由来する。
97	満水	たまり	掛川市・由来は、は、現在の掛川市満水にあたる地域で、逆川の左岸に位置する。地理的な要素が由来となっている。
98	富部	とんべ	掛川市・由来は、源義仲の家来であった富部太郎清久と富部太郎清永の兄弟が、この地に住み着いた事に由来する。
99	幡鎌	はたかま	掛川市・由来は、かつて深い淵に臨んでいた村であった事から「端釜（はたかま）」に由来すると思われる。
100	水垂	みずたり	掛川市・由来は、村内を流れる水垂川に由来すると思われる。
101	遊家	ゆけ	掛川市・由来には諸説あり、主なものは、神事に携わる「靱負（ゆきへ）」の「伴男（ともを）」という役職に由来する説と、「弓削（ゆげ）」という姓の古い家があった事から「弓削」が転じて「遊家」になったという説。
102	五十海	いかるみ	藤枝市・由来は、葉梨川流域の低湿地帯で洪水が頻繁に発生した事に由来する。この地域は、「伊賀留美」とも表記され、湿田や泉が多く存在する。
103	築地	ついじ	藤枝市・由来は、巴川河口の湾岸に堆積した砂礫や大地震による隆起、津波で出来た土地を、明治時代に港湾開発の為に「築き固めた」ことに由来する。
104	益津下	ましづしも	藤枝市・由来は、かつて駿河国に存在した益津郡（ましづぐん）に由来する。古代には「益頭郡」と表記され、「和名抄」には「末志豆」と訓が記されている。
105	大堰	おおぜき	御殿場市・由来は、河川をせき止める「堰（せき）」に由来するが、特に水の流れを制御するための大きな堰があったと思われる。
106	竈	かまど	御殿場市・由来は、源頼朝が富士の巻狩を行った際に、食事の為にかまどが置かれた場所に由来すると伝えられる。この地域には、かまどとして使われたとされる「夫婦石」と呼ばれる一対の巨石も存在する
107	茱萸沢	ぐみざわ	御殿場市・由来は、「茱萸（グミ）」という植物が繁茂している沢が由来する。
108	柴怒田	しばんだ	御殿場市・由来については不明ですが、富士山の東麓に位置する高原地帯で、約4万年～2万年前の古富士火山の噴火による火山灰層が美しく積み重なった地層です。
109	北久原	ほくくばら	御殿場市・由来については不明。

110	西同笠	にしどうり	袋井市・由来については不明ですが、元々同笠村は存在したが、新田開発によって西、東同笠村などの地域が増えたと思われる。
111	板戸一色	いたどいちき	下田市・由来には複数あり、特に「一色」という地名には、古代の氏族や中世の支配者、あるいは税制に由来するものがある。
112	田牛	とうじ	下田市・由来は、牛を多く飼育していた事に由来する。多牛とも表記されることもあった。
113	吉佐美	きさみ	下田市・由来は、古くは「月吉村」とも称し「きさ貝」が採れる海にちなむ。
114	土肥	とい	伊豆市・由来は、奈良時代の記録にも残る古い地名で「土肥（どひ）」が転訛して「どい」となり、さらに「とい」と読まれるようになった
115	八幡	はつま	伊豆市・由来は、古くから日本で信仰されている武道の神である応神天皇の御霊とされる八幡神に由来する。八幡神は多くの（「八」は「多くの」を意味する）旗（拠り所）に神が寄り付くという意味を持つとされている。
116	沢水加	さばか	菊川市・由来は、台地を潤した雨水が斜面から湧き出て、幾筋もの細い沢の流れが加わって沢水加川になる事から、この地名が付いた。
117	壱之上	ままのうえ	伊豆の国市・由来についてははっきりしませんが、かつて「壱之上村（ままのうえむら）」と呼ばれていた。北条氏の所領役帳には、小坂（おさか）の一部として記されており、元々は田中某の所領でした。天正18年（1580年）には、伊奈忠次による検地が行われ「壱上」の検地高は京高で112石あまりでした。
118	相良	さがら	牧之原市・由来は、平安時代後期に遠江国榛原郡相良庄の領主となった相良氏に由来する。
119	熱川	あたがわ	賀茂郡・由来は、かつてこの地に「熱い川」が流れていた事に由来する。源泉温度が非常に高いため、川の水が温かった事に由来する。
120	石廊崎	いろうざき	賀茂郡・ゆらいは複数あり、「石室（いろう）神社」に由来する説や、岩が群がっている地形に由来する説がある。
121	日野	ひんの	賀茂郡・日野という地名は、日本各地に存在するが、由来はそれぞれ違う。静岡県の「日野」の由来は不明です。
122	納米里	なめり	駿東郡・由来は、溶岩台地でありながら土壤に覆われ、なだらかで滑らかな地表をしている事に由来する。
123	神戸	かんと	漆原郡・静岡県内の「神戸」という地名は、地域によって異なる読み方と由来がある。吉田町は「かんど」、富士宮市は「ごうど」、漆原郡は「かんと」と読む。由来は、神社に付属する地域などがある。

愛知県



NO	地名	読み方	由来
1	香流橋	かなればし	名古屋市・由来には諸説あり、香流川に架かる橋に由来し、かつては「土橋」とも呼ばれた。涸流川（かれがわ）説では、涸れることのない川という意味で、金流川（かなれがわ）説では、宝が連なる川という意味、片流れ（かたながれ）説では、南から北へ低くなっている地形から転じたという説がある。
2	主税町	ちからまち	名古屋市・由来は、江戸時代に尾張藩の勘定奉行を務めた野呂瀬主税（のろせちから）がこの地に屋敷を構えた事に由来する。
3	撞木町	しゅもくちょう	名古屋市・由来は、町内を通る道がT字路になっており、その形状が鐘を打つ棒の「撞木」（しゅもく）に似ていた事に由来する。
4	味鏡	あじま	名古屋市・由来には諸説あり、物部氏の祖神である「宇麻志麻治命」（うましまじのみこと）に由来する説と、湿地帯を意味する「悪地間

			(あくちま)」が転訛したという説がある。
5	香呑町	こうのみちょう	名古屋市・由来は、稲生町（いのうちょう）にあった小字名の「香呑」に由来する。
6	栄生	さこう・さこ	名古屋市・由来は、元々「狭いところ」を意味する「サコ」という言葉に由来し、後に縁起の良い「栄」の字が当てられた。明治時代に名古屋市編入される際「栄」が生まれた地である事にちなんで「栄生」と表記になった。
7	長箴町	ながおかちょう	名古屋市・由来は、稲葉地町の小字名の「長箴」に由来する。
8	泥江町	ひじえちょう	名古屋市・由来は、広井村の古称「泥江」に由来する。堆積低地を意味する「泥地（ひじち）」が語源とされる。平安時代末期の文献にも「泥江懸天神」という記述がある。
9	水主町	かこまち	名古屋市・由来は、尾張藩の軍用船を管理する水主（船の乗組員）が住んでいた事に由来する。
10	杵中	いりなか	名古屋市・由来は、かつて上池や古提池にあった「埧（いり）」と呼ばれる水門に由来する。この「埧」は、尾張地方特有の漢字で、水量を調節するための水門を意味する。
11	御器所	ごきそ	名古屋市・由来は、熱田神宮の神事に使う土器を制作していた場所に由来する。この地域はかつて熱田神宮の神領であり、神事用の「御器」を作る場所であった事から「御器所」と呼ばれるようになった。
12	新瑞橋	あらたまばし	名古屋市・由来は、かつて存在した「新屋敷村」の「新」と「瑞穂村」の「端」を組み合わせた合成地名です。この二つの村を結ぶ山崎川に架けられた橋の名前が由来。
13	御菘町	おたばこちょう	名古屋市・由来は、かつてこの地で尾張藩主に献上する石仏たばこが栽培されていた事に由来する。
14	春敲町	しゅんこう ちょう	名古屋市・熱田神宮の東門である「春敲門」をはるかに望める地であった事に由来する。
15	烏森	かすみり	名古屋市・由来は、「カラスが多く集まる森」に由来する。
16	包里	かのさと	名古屋市・鎌倉時代の富田庄絵図に「包里」の文字が確認できる事から、古くから使われていたと思われる。
17	大端郷町	たいとうろう ちょう	名古屋市・由来は、「尾張国地名考」によると、「大棟梁（だいとうりょう）」に由来する。
18	土古町	どんこちょう	名古屋市・由来は、元文5年（1740年）に開発された「土古山新田」に由来する。
19	呼続	よびつぎ	名古屋市・由来は、かつてこの地域が海岸線に位置し、丘陵地が平地に落ち込む地形を表す「よびつぎ」という言葉に由来する。
20	吉根	きっこ	名古屋市・由来は、かつて住民が「桔梗（ききょう）」を「キッコ」と呼び鳴らしていた事から、誤って「吉根」と表記されるようになったという。
21	志段味	しだみ	名古屋市・由来は、庄内川が形成した河岸段丘を示す「シナ（階・科・品）と接尾語の「ミ」に由来する説が有力です。また、尾張山の

			峰からしたたる水の幅広く落ちる場所から来ているという伝承もある
22	香流	かなれ	名古屋市・由来は、「片流れ」が転じたとする説と、「川流」の好字化であるとする説がある。
23	飯村町	いむれちょう	豊橋市・由来は、源頼朝伝説に由来するが「いむれ」という読み方は珍しく、具体的な由来は不明。
24	雲谷町	うのやちょう	豊橋市・由来は、南北朝時代から戦国時代にかけて「雲谷郷」という名称が記録に残されている。江戸時代には「鶺之谷村」「鶺野谷村」「雨野谷村」と言った表記も見られる。
25	曲尺手町	かねんてちょう	豊橋市・由来は、街並みが「曲尺（かねじゃく）のように屈曲している事に由来する。また、かつて東海道吉田宿の吉田城下にあった「曲尺手門」から名付けられたともいう。
26	嵩山町	しせちょう	豊橋市・由来は、中国の嵩山（すうざん）に由来する。永仁年間（1293年～1299年）に中国から渡来した僧である日顔（にちがん）が、この地の山並みの景観が故郷の嵩山に似ていると感じ、名付けたという。
27	木下町	きくだしちょう	岡崎市・由良は、かつて額田郡木下村という村が存在した事が由来。
28	千万町町	ぜまんじょう ちょう	岡崎市・由来ははっきりしませんが、かつて多くの人々が住んでいた、あるいは豊かな土地であったと思われる。
29	外々外	そとがいと	岡崎市・由来については不明。
30	百々町	どうどちょう	岡崎市・由来は、かつてこの地にあった「百々村」に由来する。百々村には、応永年間に松平信光に従った青山光教より築かれた「百々城」があった。
31	富尾町	どんびゅう ちょう	岡崎市・由来は、「トン」が高い場所、「ビュウ」が別府を意味し、「高い別天地」という地形的特徴に由来している。また、「鳶尾」とも表記され「とんひう」や「とんふら」とも読まれる事もある。
32	合歓木町	ねむのきちょう	岡崎市・由来は、「合歓木」という植物に由来すると思われる。
33	矢作町	やはぎちょう	岡崎市・由来は諸説あり、中世に矢を作る人々が住んでいた、または近世に破魔矢の生産地であったという説がある。また、日本武尊が当地で矢を作らせ、戦いに勝利したという伝説もある。
34	楮山	ろくえやま	岡崎市・由来は、「楮（こうぞ）と山」という地形に由来する。「楮」は和紙の原料となる植物です。
35	飽鬘	あづら	一宮市・由来については不明。
36	大和町毛受	やまとちょう めんじょ	一宮市・由来は、物部氏の一族である百舌鳥（もず）氏が尾張国中島郡に定住した際に「毛受」（もず）と表記し、その読みが「めんじょう」に転じた事に由来する。
37	真清田	ますみだ	一宮市・由来は、木曾川の灌漑用水による清く澄んだ水田地帯であった事に由来する。
38	澆漉	どぶろく	一宮市・由来は、平安時代以前から米を発行させて作る濁り酒を「濁醪」（だくろう）が訛ったものと思われる。
39	成岩	ならわ	半田市・由来は諸説あり、半田市史によると「川の流れる大きな石に

			あたってゴーゴーとなっていた事」に由来する説や、また、弥生時代から古墳時代にかけて製鉄技術が伝来した際、鉄製品の原料として採取された褐鉄鉱が、中に入った破片がカラカラと鳴る事から「鳴石」（なりわ）と呼ばれた事に由来する説もある。
40	兀山町	はげやまちょう	半田市・由来ははっきりしませんが「兀」という漢字は「高くそびえている様」を表す。全国にも「兀」を含む地名は複数存在する。
41	岩滑	やなべ	半田市・由来は複数あり、「磐鍋村」と記されたり「矢奈部」「屋鍋」「柳部」とも表記されたりした事が文献で残っているが、明確な由来は不明。
42	神屋町	かぎやちょう	春日井市・由来は、山々に挟まれた谷間が鍵の形に似ていた事に由来する「かぎや」という呼び名と、日本武尊が東征の際にこの地で休憩したという伝説に由来する。
43	田楽町	たがらちょう	春日井市・この地の田柄町の由来は不明ですが、東京都練馬区の田柄町の由来は諸説あり、主なものは、水はけの良い地質で稲作に適さず「田が枯れる」事から「田枯」（たがれ）が転じて「田柄」になったという説がある。
44	出川町	でがわちょう	春日井市・由来は、村の中央平地から清水が湧き出て田んぼの用水となり、其水が枯れる事がなかった事に由来する。
45	国府町	こうちょう	豊川市・由来は、その名の通り、古代三河国の国府が置かれた場所であると思われる。三河国府跡は、三河惣社の東側にある「曹源寺の敷地内に位置している。
46	千両町	ちぎりちょう	豊川市・由来は諸説あり、主な説は「今昔物語」の犬頭の糸の説話にちなみ、献上する白糸が千両に値した為「千両」と名付けられたという説と、集落が上下に分かれていてちぎれた事から「千両」と書き「ちぎり」と称した説、山林地であった為「千木里」（ちぎり）と称した説がある。
47	御津町	みとちょう	豊川市・由来は、主に孝元天皇がこの地に船を着けた事に由来する「御津の湊」という説が有力です。また「ミト」は水門や港を意味するという説もある。
48	義原町	ばいばらちょう	津島市・由来ははっきりしませんが、「義」という字は「つのよもぎ」と読むので、この植物が生える野原や由来と思われる。
49	半城土	はんじょうど	刈谷市・由来は、かつてこの地に「半城土城」があり、土豪の野田太郎左衛門尉清氏や稲垣雅楽助の居城と伝えられる。歴史的には「半昌土」や「繁昌土」とも表記された事もある。
50	足助町	あすけちょう	豊田市・由来は、「安住の地」に由来する「飛鳥」や「安住処」と同義語と考えられる。古くから交通の要衝であった為「足助」という漢字が当てられたと思われる。
51	拳母町	ころもちょう	豊田市・由来は、古くは「衣」と書かれ、江戸時代の天和年間頃に「拳母」と改められた。垂仁天皇の子孫である「許呂母別」（ころものわけ）がこの地に住み着いた事に由来する。

52	閑羅瀬町	しづらせちょう	豊田市・由来ははっきりしませんが、断崖絶壁の川の瀬を指す地名で、江戸時代には存在している。
53	枝下町	しだれちょう	豊田市・由来は、枝下用水の取水口が設けられた地区に由来する。
54	百月町	どうづきちょう	豊田市・由来は、矢作川の峡谷の地形に由来すると思われる。ドウドウと渦巻く川と突き上げる崖の様子から名付けられた説や、「百」を「ママ」と読み、突き上げるような崖を示す「ママツキ」が転じて「ドウヅキ」になったという説がある。
55	百々町	どうどちょう	豊田市・岡崎市・由来は、かつてこの地にあった「百々村」に由来する。またこの地には、応永年間（1394年～1427年）に青山氏によって築かれたとされる「百々城」があった。
56	仁王沢連	におうぞうれ	豊田市・由来については不明。
57	林添町	はやしづれ ちょう	豊田市・由来は複数あり、主なものは、官の植林地に沿った場所を意味する説と、焼き畑農業の地を意味する説がある。
58	月原町	わちばらちょう	豊田市・由来ははっきりしませんが、江戸時代には三河国加茂郡月原村と呼ばれていた。
59	陸田	くがた	稲沢市・由来は、陸稻（おかぼ・りくとう）の栽培に関連していると思われる。
60	長束町	なづかちょう	稲沢市・由来は、豊臣五奉行の一人である「長束正家」がこの地の出身である事に由来する。
61	宇連	うり	新城市・由来についてははっきりしませんが、中世には「名倉郷」に属する集落であり、寛永期（1624年～1644年）の検地帳写しには「名藏之内宇連村」と記されている。縄文時代の土器が発掘されており、古くから人の営む地域と思われる。
62	黄柳野	つげの	新城市・由来は、黄柳村と多利野村が合併して出来た合成地名。黄柳村は延喜年間に伊勢神宮へ奉納される「ツゲ」の産地で、多利野村は慶長年間には「多離村」と記録されており、遠く離れた集落という意味合いが合ったと思われる。
63	佐布里	そうり	知多市・由来は諸説あり、「左右杣」（そうり）が転じたとする説、「左右の里」を合わせたという説、「焼畑」を意味するという説がある。左右杣説では、加世端池（かせばたいけ）の水が、東谷と西谷に分かれる場所に、左右2つの杣（いり：水門や堰）があった事に由来する説。左右の里説では、東谷と西谷という2つの里を合わせて「左右里」（そうり）と称した事に由来する説。焼畑説では、かつて行われていた焼き畑を意味する説がある。
64	池鯉鮒	ちりゅう	知立市・由来は、知立神社の御手洗池に鯉や鮒が多く生息していた事に由来する。この表記は江戸時代に東海道五十三次の宿場町として栄えた際に一般的に使われた。
65	乾改	いぬいあらため	田原市・由来については不明。
66	鯛浦町	うぐいうら ちょう	弥富市・由来は、「ウグイという魚」が多く生息していた土地であった事に由来する。

67	三稲	さんと	弥富市・由来は、稲荷信仰に関係していると思われる。この地域は、江戸時代に尾張国海西郡三稲新田として文化8年（1811年）に宇佐美勘左衛門らによって開拓された。
68	楽平	よしひら	弥富市・由来は、明治8年（1875年）に草平新田と極楽寺新田が合併して「楽平村」となった。
69	長湫	ながくせ	長久手市・由来は、「長く続く湿地」を意味する「長湫」（ながくて）に由来する。
70	岩作	やぎご	長久手市・由来は、元々は石作（いしつくり）神社の社名に由来する「石作郷」が、音の短縮と漢字の変更により「石作」に転じたという
71	海部	あま	海部郡・由来は、古代に漁業や航海に携わった「海人部」（あまべ）という職能集団に由来する。この地域は古くから海との繋がりが深く、海産物を朝廷に納めたり、公開技術で仕えたりした人々が暮らしていた事に由来する。
72	目比川	むくいがわ	海部郡・由来は、稲沢市目比町に伝わる「目比の大沼」の昔話に登場する「むくい神社」との関連があると思われる。この昔話では、むくい神社のお使いとされる大蛇が、船の邪魔をする藻を食べるという話が語られている。
	阿久比	あぐい	知多郡・由来は、「アク（悪所・低湿地）・イ（井・居）が語源という説で、かつてこの地域が水に恵まれた低湿地であった事を示している
74	凸清水	でこしみず	阿久比郡・由来は、元々は「大清水」「中清水」と呼ばれていた地域で湧き水が出る地形的特徴に由来すると思われる。
75	凹清水	へこしみず	阿久比郡・由来は、凸清水に同じ。
76	深溝	ふこうず	みよし市・由来は、この地域は三ヶ根山と遠望峰山に挟まれた広い谷のような地形をしており、「深い溝」のような地形が地名の由来。
77	筋生町	あざぶちょう	みよし市・由来は複数あり、主なものは、徳川家康が戦いに夜具れた際に、草に隠れて助けられたという説と、麻が良く生えていた事から「麻生」と呼ばれたという植物が由来の説がある。
78	福谷町	うきがichょう	みよし市・由来に諸説あり、「漚（うき）」という文字が「浮」に転じさらに「福」の字になったという説があるが定説ではない。
79	神田	かだ	北設楽郡・由来は、多くの場合、神社に奉納する稲を作るための田んぼ、すなわち「神の田んぼ」があった事に由来する。
80	設楽	したら	北設楽郡・由来は、新羅人の居住地、疫病を免れる神であるシタラ神稲穂がしだれる様子、清流が滴る様子などがあげられる。
81	宝飯	ほい	宝飯郡・由来は、古代の「穂国」（ほのくに）に由来し、律令制下で「宝飫郡」（ほおのこおり）と表記された後「飫」の字が「飯」に誤記された事で「宝飯郡」（ほいぐん）と呼ばれるようになったという。
82	猿投町	さなげちょう	名古屋市・由来は、猿投山に由来する。猿投山は、景行天皇がいたずら好きの猿を海に投げ捨てたところ、その猿が住み着いたという伝説に由来する。

制作・編集にあたり、インターネットの「ウィキペディア」及びA Iデータを活用して作成しています。

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会 会員)

連絡先 090-3545-1113